

浄土

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 運輸省(特別授承認雜誌第三五二号)
昭和三十四年三月二十五日印刷 昭和三十四年四月一日発行

第二十五卷

第四号



四月号

新刊 浄土トラクト

大正大学教授 佐藤賢順著

信仰へのみちびき B六版・十六頁
定価十五円八円

目次

- 1. 大慈悲の仏教
- 2. 知性を超えて
- 3. 美的情感を超えて
- 4. 本願の不思議にて
- 5. すべてを包む愛
- 6. 人生は信ずる心から
- 7. お導びきのままに

大正大学教授 竹中信常著

仏教入門 B六版・三十一頁
定価二十円八円

目次

- 1. 馬に水を飲ませるもの
- 2. 流れゆくもの
- 3. なやみとまよいのもと
- 4. すでに救われている
- 5. 信ずるところ
- 6. 仏を思う
- 7. 新しい生活
- 8. 美わしき世界の建設

東京都品川区上大崎一の七八二

法然上人鑽仰会

振替 東京八二一八七番

浄土 四月号 目次

表紙・扉絵 結城天童

さし絵・カット 加藤金一

釈尊の隆誕と現代……………佐藤賢順(2)
宇宙時代と仏教……………後藤真雄(8)

お酒と水……………崇岳房(6)

經典解説 觀無量壽經……………阿川文正(14)

インド紀行 仏陀の地……………斎藤昭俊(11)

高僧伝 武田芳淳……………大橋俊雄(23)

権現様の御遺訓……………鈴木成元(18)

——岡崎大樹寺を訪ねて——

童話 さくら寺ののんき地藏……………伊東挙位(32)

浄土歌壇……………岩野喜久代(39)

実話 長寿の調べ……………山城正隆(22)

随想 手を撃ぐ子等……………安藤正雄(30)

勸募日記……………A・M生(40)

扉の御法語……………日本靈異記より(25)

童心仏心……………俺はどこへいった(34)

一心専称彼仏……………仏教ものしり帳(30)

人生の夜明……………須藤隆仙(35)
——法然上人御一代記(一)——

浄土

四月号

念仏の行は行住座臥をきらはぬ事なれば、ふして申さんとも、居て申さんとも、心にまかせ、時によるべし。念珠をとり袈裟をかくる事も、又折により、体にしたがつべし。ただ詮ずる所、威儀はいかにあれ、このたびかまへて、往生せんとおもひて、まことしく念仏申さんのみぞ大切なる。

法然上人御法





釈尊の降誕と現代

佐藤賢順

四月八日は釈尊のお生れなされた日であります。今から凡そ二千五百年の昔、釈尊は印度の東北の、ルンビニーという所で生まれました。ここは遠くヒマラヤの山々も望まれる所で、今はネパールの国内になっておりまして、印度とネパールの国境を超えて半日ほどの行程の所にあります。釈尊の母マヤ夫人が故郷へかえる途中、このルンビニーで釈尊を生んだということです。今でも汽車も自動車も通わない荒涼たる場所だそうで、近頃日本の旅行者がしばしばここを訪れておりますが、ここへの旅行はなかなか容易でなく、仏蹟順拝という敬虔な目的を持った人達でも、その荒野の旅路には閉口するそうであります。

しかし釈尊の降誕を讃えて歌った経論のことばは次のよう

に美しくその時の有様を伝えておりますから、しばらくそれに従って、當時を偲んでみましょう。

拘利城にほど近いルンビニー園の春はたけなわで、空には光、地には花、風は和らぎ、泉も池も水は清らかに澄んでいました。高殿欄楯は七宝をもって飾られ、鸞、鳳凰、鴛鴦、など百鳥は春を歌い、その声に和して伎楽が奏でられていました。ここにかしづく者は、顔貌、端正で、智慧、人にすぐれた姪女たち凡そ八万四千、また身を美しい瓔珞で飾った童女たちが同じく八万四千、香や華を持って従いかしづいています。かしづかれる主は、カピラワット国の国王淨飯王の後、摩耶夫人であります。懷妊の身の月日の將に満たんとする頃を、この花園に養っているのです。

四月八日、数多の姦女^{おしめ}にかしずかれて、この花園をそぞろ歩くとき、無憂樹と呼ばれる木の、枝葉も茂り、花も色鮮やかに咲き乱れる下にて、釈迦牟尼世尊は降誕し給うたのです。扶け支える者ともないのに、「百獣の王、獅子の歩みをなして」、自ら行くこと六歩して、更に第七歩目を歩んで、右手を挙げて天を指し、「われ一切の人天の中において、最尊、最勝なり。無量の生死^{しやうじ}、今において尽きん。この生涯において、一切の人天を利益せん」と高らかに言われました。

空からは二下りの、一つは温かい水、一つは冷たい水が下って、初湯となって身にそそぎ、梅檀の香ぐわしさが風と共に流れ、泉からは清らかな冷たい水が自然に湧き出で、花園には、時にあらざるに数々の珍しい花が斉しく開き、心の荒々しい者たちも、一時に慈悲の心を起し、病める者たちは直ちに治癒し、常ならば、乱れ騒ぎ鳴く禽獸^{とりけもの}も、この日は寂として声なく、川という川は流れをとどめて静まり、濁れる水も澄んで清らかになりました。――

これが経論に讃えられている世尊の降誕の時の説話の一節です。こういう文学的な叙述は、釈尊の降誕ということが、世界の文化にとって、いかに大きな意味を持っていたか、を語ろうとして、こういう象徴的な表現をしているのです。仏伝の作者たちは苦心をして、釈尊の降誕が世にもたらす大き

な意義の幾分かを叙べようとしたのです。「仏所行讃」の作者馬鳴の如きも、「須弥山は中央にあって世界をしっかりと支えているのだが、世尊が世に出でまし給うた時には、功德の風が飄^{たたよ}うて、大地は普く震動して、恰も風浪に弄ばれる小舟のようであった。」などと、大袈裟ないい方をしておりま

す。大地は喜びに震えた、世界はこの日、新たな光に照らされたという意味をのべているのです。

ところで、さきほどの叙述の中にありました「生れるとすぐ悠然と六歩のあゆみ、更に第七歩目をふみ出した」ということは何を意味するのでしょうか。六歩とは六道を象徴するのです。六道は地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上の六つの世界で、自己本位の欲望を中心として展開する人生と世界のことです。うばい合い、だまし合い、戦い合う世界です。そこでは、欲望が原因となって或る結果を招き、またその結果が原因となって次の結果を招くというように、果しなく原因結果が連って、闘いと苦しみが展開されていく人生であります。六歩を歩いて、更に次の第七歩をふみ出した、というのは、この自己中心の欲望の世界から抜け出して、争いと苦しみ的人生を超えて、平和と喜びの新たな境地にはいったという意味です。さきほどの言葉に、釈尊が「無量の生死、今において尽きん。この生涯において一切の人天を利益せん。」

といわれたとありましたが、限らない生と死の輪廻から抜け出でて、欲望を中心として動いている者を^ナ済けよう、という決意であります。(人天は人間と天上のことで、やはり天上もまだ欲望中心の世界なのです。)

釈尊は永い思索と苦行のちに仏陀となられました。仏陀とは「目ざめた人」という意味です。何から目ざめたのかというと、自分本位の迷いから目ざめたということです。また何に目ざめたのかというと、人生や世界の真実の相に^{すがた}目ざめたということです。その真実の相とはいかなることかといいますと、人生にも、世界にも、何一つとして、孤立してゐるものはない、それだけで独りで存在しているものはない、すべてのものが、相依り相資けあっている、何もかも相互的であり相関的である、ということであります。これが人生や世界の真相であります。これに随って生きていくことが、真実の人生であります。そういうことに目ざめたのが仏陀であります。これを仏陀の智慧と名づけるのであります。智慧を得るというのは物識りになるとか、利巧になるとかいうことではなくて、人生と世界のほんとうの相に^{すがた}目ざめて、世界に平和と喜びをもたらすことであります。ですから仏陀の智慧は光であります。

ひるがえって現実の世界の有様を眺めてみると、如何でし

ようか。人間の理性は進んで止るところを知らず、科学は日に月に新たらしい成果をもたらしてきます、いや日進月歩などという言葉ではまだ物足りない、時々刻々に進んでいるというべきでしょう。しかしこの人間の理性、知識の進歩は世界にどれだけの貢献をしているかといえ、もちろん速力を速めるとか距離を短縮するとか、動力を利用して人間の力の数十倍の力が使えるようになるとかその他いろいろと人間の生活を幸福にしているところも多いけれども、またその反面、人間の闘争のための武器、兵器を発達させて、人類を不幸に陥れることが多いのであります。むしろその方が何倍、何十倍多いかわかりません。近頃の新しい核兵器をもし使用するような場合があるとすれば、その結果を想像すると、人類がこの地上から姿を消す時期も、そう遠いことではなさそうに思えて、誠に慄然とせざるをえないのであります。宗教の立場で世界を見ると、歴史は少しも進歩してはおりません。歴史はだんだん悪くなっていきます。こういう歴史の見た方を昔から末法観といいますが、今ほど末法の意識が切々と感じられることは、釈尊以来二千五百年の歴史においてはなかったのでありましょう。

原始物理学は非常に進んで、今のような核兵器の実験というところまでできましたが、恐らく、今の物理学の基礎をきず

いたキューリーとかラザフォードとかいう人達は、自分達の研究が人類皆殺しに役立つであろうなどとは、夢にも思わなかったことでしょ。近頃の物理学の発展の跡る辿ってみますと、こういう段階に到達するのは、人間の理性の持っている宿命であつたとか考えられませんか。理性の働きを科学的な、客観的な知識の面に限っていて、ほんとうの人生と世界の相に目ざめるといふ主体的な知恵を忘れていた人類の宿命であつたのでしよう。

ヨーロッパの文明が行き詰まっていることはここ二十年位前から、西洋の心ある学者や歴史家によっていわれてきたことで、西洋文明の没落が警告されておりました。イギリスの歴史家トインビーなども、西洋文明の行き詰まりを指摘して、これを救うものは東洋の思想である、と言っております。フランスの実存哲学者マルセルも、オートメーションの発達の結果、人間までが次第に機械化されていくが、この不幸を救うのは人間の真実性の発見であると警告しています。第二次の世界大戦後、アジアの諸国がそれぞれ独立して、欧米に対する発言の力が大変強くなってありますが、これからは、アジアの思想が、ほんとうに世界に平和と喜びをもたらすために、貢献しなければならぬのであります。人間的理性とか科学的知識とかが知性の本筋から逸れて、知識を闘争の道具として使って、人類のかい滅という悲惨事が眼前に近ずいておりますが、これを救うものは仏陀の智慧の光であります。(NSBよりの放送の要旨)

(筆者・大正大学教授)

浄土宗教学院十五周年記念

講演と映画の

集い

戦火渦巻く狂乱の時代に「学問の自由」と「信仰の確立」をの大旗を掲げて時代を先駆し、戦後文化日本の再建のために他の凡ゆる学会に魁けて京都に学術大会を開催し、爾来その使命に邁進し来つた浄土宗教学院研究所の輝しき十五年の歴史を記念して、ここ東都のセンターに大仏教集会を催すこととなつた。有識具眼の士の一人でも多く相会して、思想混迷の世の大光明たらんことを念願する。

期日 四月二十日(月)午後一時—四時半

場所 東京、銀座七丁目、山葉ホール四階

講演 武田泰淳 椎尾井匡 森赫子 佐藤賢順

映画 ヘッド・ライト

参加申込みは、整理券代金百円同封にて

東京都港区芝公園十九号浄土宗務所内

浄土宗教学院

お酒と水

崇 岳 坊



一

昔、京都の嵯峨に説教の上手な坊さんが住んでいた。人呼んで能説房といた。その隣家に代々の銘酒家があった、そこの老母が出家して尼さんになった。能説房は酒が好きで、お説教をしてお布

施を貰うと、これで酒を買って飲んでばかりいた。

或る時、隣家の尼さんのところで仏事があって、能説房に導師をたのんで来た。近所の人がこのことをきいて、能説房にこういった。

「あなたは今度、酒作り屋の尼さんのところへ招かれたそうだが、あの尼さんの家の酒は水を割って売るせいか、どうもおいしくありません。お説教のついでに、酒に水を入れて売るのは罪だということ、よく話してやって下さい」

これをきいて、能説房も

「いや、私もかねがね、水ぼい酒だとい

うことは存じております。丁度よい機会だから、大いに言ってやろうと思っておりますわい」

と、大賛成で、仏事の席へ出かけて行った。

さて、読経も終り、法話になったが、肝心の講説の方はほんの申しわけに少々しただけで、あとは、酒に水を割って売ることは、人をあざむくことになり、その罪至重であることを、もったいぶって長々とお説教したものである。

仏事も終って、やっと御供養の席となる。能説房始め、よばれていた近隣の人々も、お待ちかねの大酒桶が座敷にはこぼれて来たのをみて、今日こそは、お説教の御功德にて、水割りでない、純粹のおいしいお酒がタラフク飲めるわいと、のどを鳴らしてひかえている。

やがて、尼さんがしづしづと進み出て、酒桶から杓子で一杯、並々と茶碗についで、まづ第一番に能説房へすすめた。

能説房がこれをゴックリとのみほすの

を、まわりの人々がみて、思わずツバを飲み込んでさぞかし、「これはうまい」と嘆声を発することだろうと期待していたところ、あにはからんや、一口飲んだ能説房、シブい顔をして

「何とまあ、この酒は、いつもの水くさいのにも増して、丸で、水みたいなのぢやわい。これは一体どおしたわけなのぢや」

いまいましそうにそういうと、尼さんはいたってすましたもの。

「今日は、ありがたいお説教に、酒を水にてうすめるは罪だとおおせに、早速改めまして、今回は水の中に、お酒を少々うめましたのぢや。どうぞ御遠慮なく、たとと召し上がれ」

これには一同、呆然として座敷の真中にすえられた酒桶を、うらめしそうに眺めたものである。

二

仏教のおしえをやさしく説くことが大切なことはいうまでもないことである。

しかし、わかり易くするために、段々と形がくずれてしまって、しまいには、仏教がどこかへ行つてしまふのは困る。近頃、仏教のおしえを色々、世間のものにたとえて話しをすることが流行しており、大変結構なことである。しかし、やさしく話をするには、どおしても身近かな、日常生活の中でこれを説くことになる。日常生活のことを仏教では「世法」という。毎日のくらし方をうまくやうて行く、「世間、世渡りの法」という意味である。

はじめはたとえのつもりで説いているが、そのうちに、その方が主になって、「仏法」が添え物になり、「仏法」即ち仏の説いた教えが、世間を渡る方便のよきに考えられてしまふことが往々にして出て来る。これは困ったことである。

「仏法」とはあくまでも仏のおしえであり「出世間」の道である。仏法を究めつくしたからといって、金が儲かったり、家の中が裕福になることと直接のかかわりはない筈である、「仏法」というの

は、自分が仏のような心になって、世のため、人のために役に立つことなので、金儲けや病氣なおしはそれから次に出て来る「余徳」——おまけ——にすぎない。

ところが、この頃の人、雑誌でもそうだが、おまけや附録の方に気を奪われて、肝心の本物の方がお留守になる傾向がある。

「仏法」の本道は「念仏」をとなえることとで、そのほかのことはみな附録である。お酒（仏法）に水（世法）を割つているうちは未だいいが、前の話の尼さんのように、水の中にお酒をうめるようになってしまつては、本末顛倒ということになる。

「仏法の中に世法あり、世法の中に仏法なし」

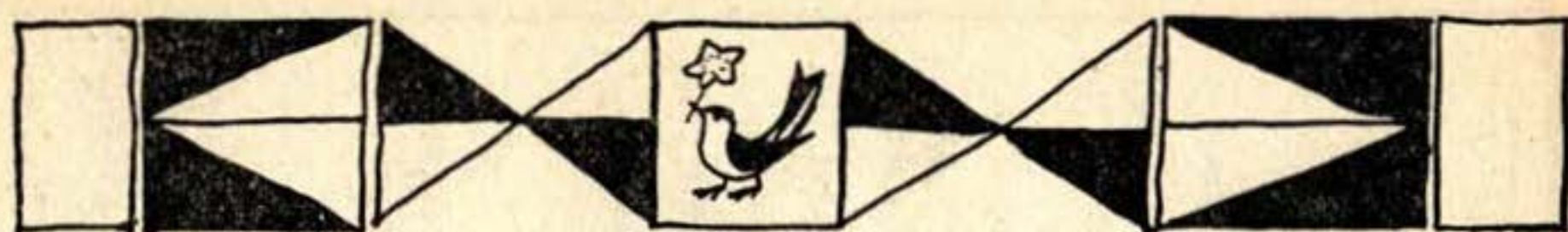
ということになるわけである。

×

×

×

×



宇宙時代と仏教

後藤真雄

○宇宙時代

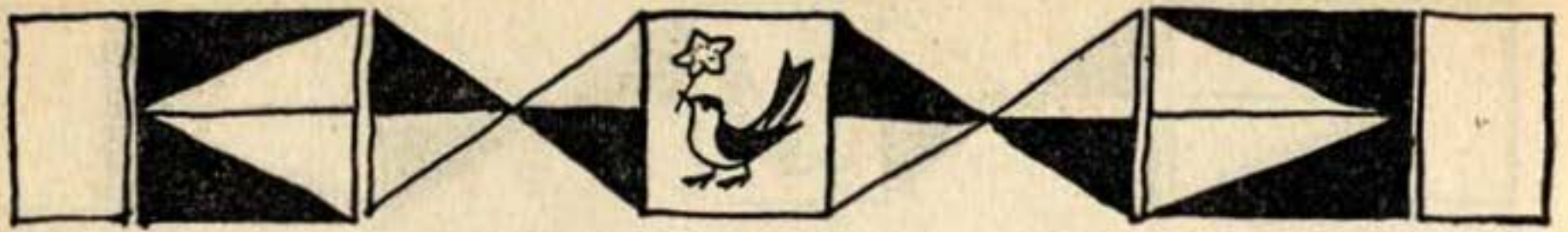
人工衛星が飛び、月ロケットが飛び、人工惑星にまで進み、月世界の探検も夢ではなくなるのも、そんな遠い時ではないような事になって来た。今まで誰も見た事のない月の裏側も、どんな風になっているのかも知れる事になり、宇宙の秘密は次々にあばかれて行く様な気がする。近代の科学の進歩は実にめざましい事である。原子力の利用も、どんどん実用化されて来る事となろう。

全く世をあげて宇宙時代の觀がある。

鉄塔世界一を誇る東京タワーも遂に出来上った。三百三十三米の高さは実際大したものである。百二十五

米の展望台上上って下を眺めると、蟻の様に見える人間、玩具の様な自動車の列、立ちならぶ、マッチ箱の様なビル、そしてビルとずっと続いている。東京は広い、としみじみ思う事である。残念乍ら、骨身をけずる様な思いで建てた自坊なぞは、ずっと霞の中に隠れて、見当すらつかない。百二十五米の上から見ても、一寸宇宙の一端を見た様な気がする。コセコセした生活から、たまには高い所へ上って広く大きく、全体を眺める事はたしかに必要である。そんな意味で、東京タワーの出現もむだではないと思うのである。

百二十五米でこれなのだから、もし月の世界から地球を眺めたら、どんな事になるだろうか、科学者の夢



ばかりでなく、この大きな夢が実現したら、冷たい争いなぞは消し飛んでしまいかも知れない。

実際に今は狭い地面から飛び上って、広い宇宙の探究へと、世を挙げての宇宙時代となっている。

○仏教の宇宙観

仏教の中でも宇宙をいそいそと考えている華嚴経等によると、宇宙をなかなか面白く考えている。大きな須弥山しゆみせんというものがあって、それには横にいくつもの段がある。その段の一つ一つを「際さい」といって、吾々の生活している際を実際というのである。須弥山の一番下の際を金輪際こんりんざいといって、「もう金輪際、止めます」なんていう言葉はこれから出ている。金輪際の下は底知れぬ水で、その下に「奈落ならく」がある。八寒八熱の地獄はそこにあると考えるのである。

須弥山の上には天があって、これを又幾段にもわけている。一番上の天を「色究竟天」等といっているがこれが「有頂天うりやうてん」である。「入学が出来て家中有頂天になって喜んでる」等の言葉の意味はこんな所から出ているのである。

その須弥山のまわりを雲の様な霞の様なものが、フワフワと取りまいてる。それをよくしらべると小さ

なほこりの様なものの集りで、その一つが地球だというのであるから、須弥山がどんなに大きいかということになる。然もその須弥山がいくつも並んでいるというのだから、宇宙の大きさも又大変なものになるわけである。

仏様の下の段にこの須弥山を型取って造ったのが須弥段である。

こうした仏教の宇宙観と天体の動きとを実際に研究する運動が、仏教家の中でも文化文政頃に盛んに起った事がある。天台の円通上人、浄土宗では軽譽存続上人等で「梵曆社中」の名でよばれているのがそれである。

○仏教のものの見方

仏教はこんなに大きなものの見方をする一方、又最少の原子を更に小さくわけて行く事も考えたのである。原子を四方、上下に切って、七つにわけて、これを極微ごくみとよんでいる。想像もつかない様な大きな事から、思いもよらない小さなものまで考えるのである。現に、科学の世界で、原子核の破壊から宇宙の探究にと進んでいるのも面白い一致である。

孫悟空が、力一杯、出来るかぎりの早さで走り



って、この位走ったらと、ふり返って見たら、まだ観音様の手のひらの上だったという話は、仏教のものの考え方の一面を伝える面白い表現だと思う。

仏教は唯いたづらに大きな事を考えたり、小さくものを見て行こうというのではない。それによって、真の姿、本当の生き方を見出そうとするのである。中道の追究であって、あくまでも現実の吾々の生活に結びついて、正しい道、正しい生き方、生き甲斐、死に甲斐を見出そうとするのである。

科学の進歩が原子力や宇宙の究明に力をそそいでいる今日、それが人生の正しい歩みと結びつかなければ何にもならないのである。

ここに宇宙時代の科学と仏教とは決して相反するものではなく、より強い結びつきを知るのである。

○宇宙時代と念仏

本当の自分の力がわかり、阿弥陀仏の大悲の力が信じられる所に「南無阿弥陀仏」の念仏は生れる。世の中で一番むづかしいのが自己の能力を本当に知るという事である。浄土教ではこれを信機しんきといっている。智慧第一といわれた法然上人が自ら愚痴の法然房と、心の底から覺られた所に法然上人の偉大さがある。一寸

した失敗やあやまちも、何とかこれを合理化して、自己満足しようとするのが吾々である。お世辞や、体裁や、儀礼で、自らを卑下していうのではなく、心の本底から、しみじみと自らを凡夫、愚痴とさとり、宗教的な反省、そこにこそ本当にふるいたつ心が起って来るのであって、「どうせ凡夫なんだから」と出来る事を振り捨てて行くのではない。力ない自分、及ばない自分と、本当に地についた足にこそ力が入るのである。そこに仏を信ずる、信法は生れ、念仏が出て来るのである。

宇宙時代に空ばかりあおいで、足もとはどうなっているのか、この時代なればこそ宗教的な反省、足もとをしっかりと見つめる事が必要ではなからうか。政治家が国家の政治をあづかるだけの価値があるかと、教育家が人の子をあづかるだけの力があるかと、夫々に宗教的な反省があってこそ、本当の政治も教育も行われるのではないであらうか。

念仏は謙虚な反省と、止むことの出来ない希望と勇氣を意味するのである。

宇宙時代なればこそ、念仏の意味は尊く、強く感ずる事である。(大本山増上寺布教師、東京教区教化団副団長)

仏陀の地

—二—

斎藤 昭俊



龍樹が隠棲したというところ

ナガルジュナ・コンダは、以前マハ・ストーパがヨーロッパ人の手によって、一九二六年に発掘されたところであったが、ブッダ・ジャンテイ（仏誕二千五百年祭）のためか、今も、大々的な発掘が行われている。やがてここは、十年後には水の底になる運命にある。西暦紀元前三世紀の頃から、アンドラ帝国が栄えたが、当時は、仏教の僧院が立ちならんで、大衆仏教の盛んなところであった。

ここで、龍樹（大衆仏教の祖）がなくなつたという話があるが、大体、二五〇〇エーカーの土地が二分されて、僧院地区と市街とに

なっている。僧院地区の方には、大学とスタジアムとがある。大学では仏教の研究が行われ、スタジアムでは学者の討論会や集会が行われたのである。宗教のための、このような大きなローマ式のスタジアムが発見されたのは、ここがはじめてである。

寺院の造り方は、みな一様である。その数は、今までに分っているだけでも、二十位ある。それには、僧侶の宿泊所が必ずついている。正方形で、中央がホール、そのまわりを各部屋が囲んでいる。

市街の方は、大きな宮殿や、港の設備（ここは山の中だが、大きなクリシナ河が流れている）が完備し、浴室などは全く当時を偲べ

るほどである。これには石灰を用いたプラスチックが使用されている。もっとも、部屋の造りにも用いられているが、ローマの貨幣がここで発見されているので、当時、ローマとの交通が盛んに行われていたものと思われる。しかし、山中の大仏教国も、十三世紀頃、一説によれば、回教徒によって破かいされたともいうし、また、インド教徒の手によって破かいされたともいう。その無惨な破かいの仕方は、石の仏像の首のないことから、一



（ナガルジュナ・コンダの僧院あと）

応想像がつく。一九五四年頃から、この一大発掘作業が行われて、あと二年続行。そして、ナガルジュナ・コンダの丘の上に、それらの遺跡を移す計画だそうである。現在、七十五人の係員と数百人の人夫が働いている。

コンジェヴェラム

これは、くさいにおいのするインド教の大聖地の一つである。マドラスの南にあって、インド教、仏教、ジャイナ教の中心地で



(ナガルジュナ・コンダの発掘に
働いているアンドラ地方の婦人)

あったところである。聖地といわれる土地には、額にヴィシヌーのしるしをつけた者達が多くいる。今は仏教もジャイナ教もなく、聞いても知っているものがない。

ヴァイクンタ・テンプルを訪れた。ここは七世紀に出来たものであるが、ヴィシヌーを祭ってある。次に行ったところが、カイラサナート・テンプルで、この時代でも一番古いものとされている。ここは、ジヴァ神を祭る。しかし、参拝者はほとんどないようである。次に行ったところが、エカンパレスワラ・テンプルで、一番大きなゴブラムがある。ここもヴィシヌーを祀って、十二世紀に建てられたものであるが、コンジェヴェラムで一番大きな寺院である。次に行ったのが、マデングスワラ・テンプルで、小さい、参詣のない寺である。しかし、名の知られた寺で、このタイプの寺が、ほかに三つばかりあるそうだ。その後でリキシヤ（人力車）に仏教寺院を案内させたら、崩れたインド教寺院に連れて行った。

仏塔サンチ

サンチは鉢をふせたような恰好の仏教の塔で有名である。それに、四方、東西南北にそれぞれ門があって、この門には、色々な仏教儀式や種々な模様が彫刻してある。これは紀元前のもので、サンチは紀元前三世紀から十一世紀に至る千四百年続いたといわれている。

この塔は、第一、第二、第三、と段々に小さくなって行く三つからなっている。形は大体同じ。第二のものには、第一のような門はなく、第三のものには一つだけある。アソカ王の当時から始まって、壮大な僧院が営まれたことは明かであるが、沢山の僧院跡があるし、仏陀の像を祀った、多くのビハラの跡がある。これは、約三〇〇フィートの丘の上にあって、この辺りでは一番高く、ながめがよい。このの海拔は一五〇〇フィートというが、私は六月十三日、十四日とここを訪れたのだが、この地方は五月、六月が一番暑い時だから、勿論、時期はずれで、私の泊った政府の旅行者宿舎は、ホテルと同じように造られ、仲々立派なものであった。この宿は、二年前の二五〇〇年祭に際し造られたものであ

る。邪魔するものもなく、ひとりぼっちで丘の上に佇んでみた。たえず、涼しい風が吹いていた。

アチャンタ

アチャンタは、アウランガバートから六〇マイル、朝、六時半発、バスで出かけて、ついたのが十一時。ここは岩を掘って造つたものだが、紀元前二世紀から七世紀までの間に行われたもので、全部仏教のものである。



ナガルジュナ・コンダで発掘されたもの

(童)(心)(仏)(心)

花まつり

健ちゃんは、おかあさんといっしょに、花まつりのあるお寺に、お墓参りに行きました。

ゆらゆらと昇るお線香の煙。しつとりとぬれた墓標。健ちゃんは、両手をあわせました。

「ねえ、おかあさん。何だか心がスーとするね。ああ、いい気持ちだ。」

二挺拳銃を腰に、あばれ廻る健ちゃん。ズボンのかわく暇もなく、後から後からと洗濯物を製造する健ちゃん。——それが、この仕末です。

(この子にも、仏性というのか、そういうものがあるんだわ。朝ごはんの前と、夜寝る時には、御仏壇を開いて、合掌させる習慣をつけさせましょう。いえ。私自身がまず模範を示さなければ。)

花み堂の仏様に、あま茶を無心にかける健ちゃんの後姿を眺めながら、おかあさんは、そう心の中でつぶやきました。(桐)

第八、九、十、十二、十三窟は、小乗仏教の時代に属するものという。この窟は、二十四の僧院と五つの寺院とである。これらには殆んど壁画があったらしい。第一窟には、こ

れらの壁画の大分がのこっている。有名な踊りの壁画もここにある。

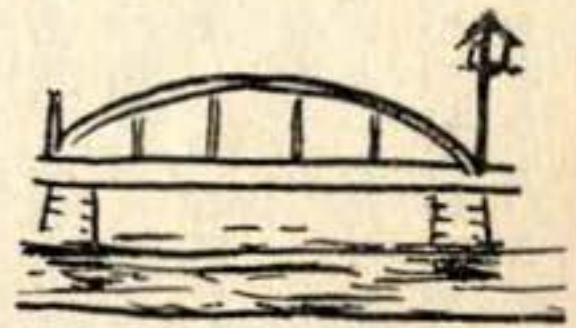
これらの壁画は五世紀頃に描かれたものである。髪には色々のかざりがついているが、乳房はむき出しにして、腰巻をしている姿、それはアチャンタの王女と呼ばれているもの

で、有名である。また菩薩像も画かれている。ポーズは王女と同じで、花をもっている。婦人がすぐ側に立っている。後姿である。

第十七窟には、ラブ・シーンがある。人間の自然の姿をそのままに描こうとしたのであろう。第十四窟は非常に大きいもので、中心の奥に塔があり、アーケードがある。こうした形式のものは、全部で三つぐらいあった。ナガラーチャの像もあった。

觀無量壽經

—經典解説(二)—



方にある耆闍崛山（訳して靈鷲山と云う）に於て、千二百五十人の仏弟子と三万二千の菩薩達を前にして説法して居られた時に、王舎城内で起った悲劇に起因して説かれた經典である。

浄土宗の元祖法然上人は、無量寿經（大經）、觀無量寿經（觀經）、阿弥陀經（小經）の三經あげ「總依三經別依一經」と云って、三經中を浄土宗所依の經典として、その著「選択本願念仏集」の中に立てられ、此の三經は浄土三部經と稱して尊重されている。

淨土宗の元祖法然上人は、無量寿經（大經）、觀無量寿經（觀經）、阿弥陀經（小經）の三經あげ「總依三經別依一經」と云って、三經中を浄土宗所依の經典として、その著「選択本願念仏集」の中に立てられ、此の三經は浄土三部經と稱して尊重されている。

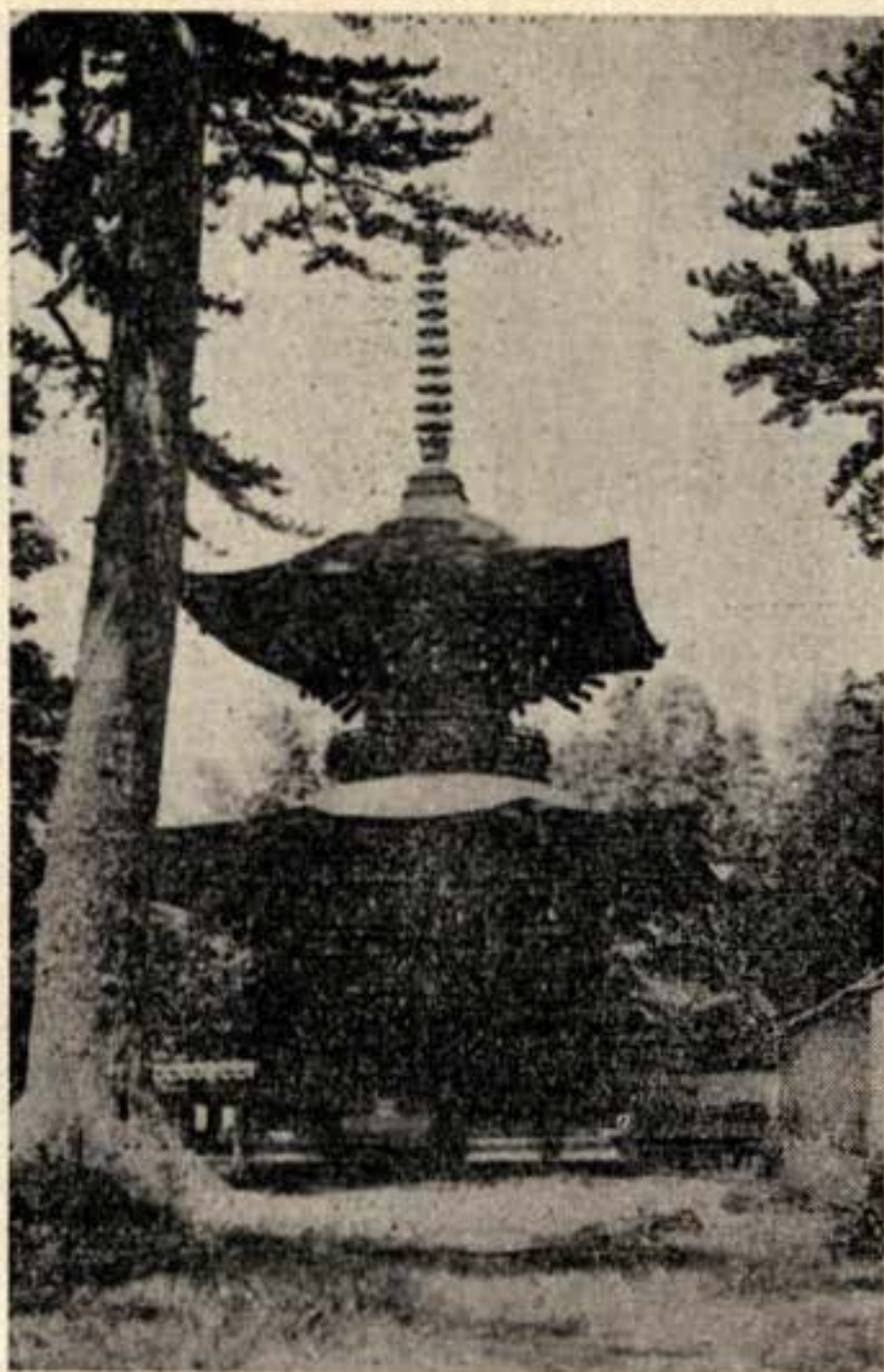
三部經は一貫して念仏往生を説くものであり、觀經は釈尊が韋提希夫人の請に依って王を企んで王舎城の太子阿闍世に、「汝新王と盤となったものは、今此処にあげる觀經であり、阿弥陀經は、阿弥陀仏の名号を称なれ、我れ仏とならん」と誘った。そして驚る。即ち上人はその師善導大師を弥陀の化身へる者は必ず往生出来る旨を説き、それを六き懼れてためらう太子に、提婆は太子の生誕として仰ぎ偏依善導し、大師の著「觀經疏」に方諸仏が証明されたものである。前号に於てにまつわる忌わしい作り話を語ったのである。即ち王舎城の主頻婆娑羅王は、后韋提以て正所依の經典とするのである。浄土宗第七祖了譽聖上人は觀經を特に重視する所以に就て、(一)有縁の經なる故に、(二)相伝の經な

此の觀經は、釈尊が摩伽陀国王舎城の東北に就て、(一)有縁の經なる故に、(二)相伝の經な

き、三年が待てずに仙人を殺害して了った。で口を漱ぎ身を清めて、遙かに釈尊の居られ事は出来ません」と誠心をこめて意見した。日ならずして後は懐胎したが、占師は天寿をる耆闍崛山の方に向い、合掌敬礼して、「御太子はこの忠告の前には如何ともする事が出全うし得なかった仙人の恨みに依り、生まれ弟子の大目犍連は私の親友であります。どうか目犍連をお遣はし下さいまして、幽閉されつけて再び大王の所へ行かれぬ様、深宮に幽言した。王の喜びは忽ち恐怖と変り、一策をた私に戒をお授け下さい。」と一心に釈尊の御閉して了った。幽閉の身となった夫人は、我案じて後に意を含め、高楼の上から王子を生加護を乞い願はれたのである。神通力を以てが子の逆罪を犯す事を憂い、又大王の死を懼み落させたのである。然し地上に落された嬰兒は、不思議にも健やかな産声をあげた。損て、毎日親しく大王に戒を授けられた。釈尊救いを求めたのである。この韋提希夫人の切われたのは僅かに小指のみであつた。提婆のは又説法第一と云われる富楼那尊者をも王宮なる願いを知つた釈尊は、目犍連と阿難尊者悪心を見ぬき得なかった太子は、この物語をに遣はし、大王の為に説法されたので、大王をお供に連れ、自ら王宮に來臨されて夫人に聞かされて父王に深い恨みを抱くに至つた。は身心共に安穩し、獄中にあつても一向に衰え苦しむ事がなかったのである。釈迦牟尼如来の尊い御姿を拝して、五体を地こへ入る事を禁じて、自ら国王の位に即いたのである。所が常日頃より大王を尊信し敬愛母后韋提希夫人及び仏弟子目犍連・富楼那の事を知つて大いに憤怒し、今度は母后を殺そうと計つた。然しこれを知つた月光・耆婆の者を従兄弟にもたれたのでしようか」と此のてはと、香水で洗い清めた身に酥密（牛羊の乳から作った乳酥に蜂蜜を加へたもの）を塗に父王を殺害した例は沢山ありますが、未だなる世尊の御姿とは相反し、自分達が一国のり、その上に乾麴（乾飯の粉末）をつけ、淨母后を殺した例は聞いた事がありません。若主であり当然幸福に暮せる身であり乍ら、我衣を着て之を覆い隠し、身を飾る多くの瓔珞し母后を殺すならば、王族の名誉を汚すものが子の為に投獄されると云う皮肉な運命に会の中には葡萄の酒や淨水を入れて、ひそかにであり、私共はそれを見ている事は出来ませうと云う世の無常を嘆いて、「この様な憂い獄室に入り大王に捧げていたのである。大王ん。その行為は梅陀羅（屠殺を業とする者）悩みのない世界をお教え下さい」と清淨安樂は夫人の身につけた食物を食べ終ると、淨水の輩に等しいもので、我々は国王として戴くの世界を教示されん事を嘆願した。

権現様の御遺訓

—— 岡崎の大樹寺 ——



塔宝多宝国

鈴木 成 元

がよいことは
いうまでもな
い。それはと
もかく気の許
す友人と旅を
するのは素晴
らしいもの
で、旅の疲れ
などは一向気
なことはない。しかしこの急行も食いしんぼう
にはちっと都合の悪い場合無きにしもあらず
である。私もその一人で多くの思い出を持っ
ている。停車する駅毎にお腹の皮を刺戟し、

次の停車駅を待ちきれずに食堂車へと馳せ参
じる。このような弥次喜多道中は昨年の花見
時であった。

東京を出て横浜の瓢ちゃんを攻略し、次々
と名物をなぎ倒して岡崎駅についたのは昼下
りであった。岡崎という町は実に面白い町
で、国鉄の駅周辺は実に閑散としている。そ
れは鉄道開設当時危険だからという先覚者の
言でわざと駅を町はずれに作ったからであ
る。今考えると滑稽な話であるが、そして全
く不便極まりない話であるが、当時は真剣に
そう考えたらしい。駅を降りると珍らしい電
車が走っている。明治の辻馬車を電車に改造

何といっても汽車の乗心地は東海道線に限
る。同じ料金を払っておりながら、こんなに
異なるかと東北の田舎者にはつくづく考えさせ
られる。その汽車もイコボタリより急行の方

にならない。しかしこの急行も食いしんぼう
にはちっと都合の悪い場合無きにしもあらず
である。私もその一人で多くの思い出を持っ
ている。停車する駅毎にお腹の皮を刺戟し、

したと思えば間違いない。全く古風そのもので御伽の国に行っている心地がする。先日平泉に行った時駅から中尊寺まで辻馬車が走っており、その馬子が日本で一台だと威張っていたが、それよりもこの電車の方が古風であるから面白い。乗っていても何か気の毒で、下りて押してあげたい位である。ともかくぶつぶついつて走っていることは事実である。

そつと耳をすますと、乗る人さえいなければ、今頃は交通博物館に飾られて感謝されるのに、どうしてもこの老車をと絶えずつぶやいているようでもあるが、坂になるとそれが一層ひどくなる。それも勤務評定のしからしむる所なのであろう。その辺は岸さんに陳請したら如何であらうか。しかし運転手は時代の先端を行く名鉄のユニホームを着用しており、乗客もラッカサンスタイルという当世流行の先端を行く娘さんが多いのは、何かこの電車に独特のミリキがあるらしい。

その市電に乗って殿橋にさしかかる頃には船に乗っている様な錯覚におち入る。ほどよいローリングとピッチングはまさにそれである。「五万石でも岡崎様は、お城の下まで船

がつく」と難かしい節に合せてのんびり踊る毛槍を持った奴の姿は、この市電にも相通ずるところがあるようだ。菅生川^{すけう}の土手に並んだ桜並木に別れを告げ、アクビを二つ位すると終点大樹寺駅である。毎度御乗車下さいまして有難うございますと決り文句をいう車掌の声もそこそこに、下車して背のびをする私ではあった。

大樹寺は成道山松安院大樹寺といつて、文明七年（一四七五）、松平親忠が阿弥陀院の勢譽愚底上人を招いて建立した寺であり、松平家の菩提所であることはいうまでもない。しかし何といつてもこの寺を有名にしたのは徳川家康である。家康は五ヶ条の遺言を残し、その一つに、「わしのなき後は本家本元である三州の大樹寺に位牌を安置してほしい」といつている。そこで徳川家代々は非常にこの大樹寺を大切にし、十三代將軍家定の安政年間になると、すっかり境内の建築物はととのった。

最近作られたのであろうか、近代的な白い石の塀の真中に、スズけた古物がある。境内に溶け込んでいるせいかあまり大きくは見え

ないが、近ずくと流石に大きい。これが大樹寺三門である。この門は寛永十八年（一六四〇）三代將軍家光の建立したもので、楼上には「大樹寺」と後奈良天皇の勅額がかかっており、また釈迦三聖と十六羅漢の木像が安置されている。実にすばらしい門で、私のすきな三門の一つである。というのは、東福寺・大徳寺・仁和寺・知恩院・増上寺等、多くの三門に特有な禪宗建築の嗅みが全くないからである。そればかりでなくこの三門は、素朴な純日本化された建築様式で、下層と上層の間が適当で、ぐっと引きしまり、外観も頗る勝れている。知恩院の三門の上層には石川五右衛門が住んでいたとか、羅生門の二階には死人が捨てられていたとかいう怪奇な伝説があるが、それはこれらの門が人々を恐怖させるに十分な大きさを持つからであらう。けれども時間的な差はあれ、この大樹寺三門はたゞみきっている我々を緊張させるような不思議な力を持っている。

襟を正して三門を入ると、正面に大きな体を持てあました本堂がどっしりと座っており、山道石畳の両側にある数基の石燈籠は、

権現様の御遺訓

—— 岡崎の大樹寺 ——



塔宝多宝国

鈴木 成 元

がよいことは
いうまでもな
い。それはと

次の停車駅を待ちきれずに食堂車へと馳せ参
じる。このような弥次喜多道中は昨年の花見
時であった。

もかく気の許
す友人と旅を
するのは素晴
らしいもの
で、旅の疲れ
などは一向気

東京を出て横浜の瓢ちゃんを攻略し、次々
と名物をなぎ倒して岡崎駅についたのは昼下
りであった。岡崎という町は実に面白い町
で、国鉄の駅周辺は実に閑散としている。そ
れは鉄道開設当時危険だからという先覚者の
言でわざと駅を町はずれに作ったからであ
る。今考えると滑稽な話であるが、そして全

何といっても汽車の乗心地は東海道線に限
る。同じ料金を払っておりながら、こんなに
異なるかと東北の田舎者にはつくづく考えさせ
られる。その汽車もイコボタリより急行の方

にならない。しかしこの急行も食いしんぼう
にはちっと都合の悪い場合無きにしもあらず
である。私もその一人で多くの思い出を持っ
ている。停車する駅毎にお腹の皮を刺戟し、

く不便極まりない話であるが、当時は真剣に
そう考えたらしい。駅を降りると珍らしい電
車が走っている。明治の辻馬車を電車に改造

したと思えば間違いない。全く古風そのもので御伽の国に行っている心地がする。先日平泉に行った時駅から中尊寺まで辻馬車が走っており、その馬子が日本で一台だと威張っていたが、それよりもこの電車の方が古風であるから面白い。乗っていても何か気の毒で、下りて押してあげたい位である。ともかくぶつぶついつて走っていることは事実である。

そつと耳をすますと、乗る人さえいなければ、今頃は交通博物館に飾られて感謝されるのに、どうしてこの老車をと絶えずつぶやいているようなもあるが、坂になるとそれが一層ひどくなる。それも勤務評定のしからしむる所なのであろう。その辺は岸さんに陳請したら如何であらうか。しかし運転手は時代の先端を行く名鉄のユニホームを着用しており、乗客もラッカサンスタイルという当世流行の先端を行く娘さんが多いのは、何かこの電車に独特のミリキがあるらしい。

その市電に乗って殿橋にさしかかる頃には船に乗っている様な錯覚におち入る。ほどよいローリングとピッチングはまさにそれである。「五万石でも岡崎様は、お城の下まで船

がつく」と難かしい節に合せてのんびり踊る毛槍を持った奴の姿は、この市電にも相通ずるところがあるようだ。菅生川すけうの土手に並んだ桜並木に別れを告げ、アクビを二つ位すると終点大樹寺駅である。毎度御乗車下さいまして有難うございますと決り文句をいう車掌の声もそこそこに、下車して背のびをする私ではあった。

大樹寺は成道山松安院大樹寺といつて、文明七年（一四七五）、松平親忠が阿弥陀院の勢譽愚底上人を招いて建立した寺であり、松平家の菩提所であることはいうまでもない。しかし何といつてもこの寺を有名にしたのは徳川家康である。家康は五ヶ条の遺言を残し、その一つに、「わしのなき後は本家本元である三州の大樹寺に位牌を安置してほしい」といつている。そこで徳川家代々は非常にこの大樹寺を大切にし、十三代將軍家定の安政年間になると、すっかり境内の建築物はととのった。

最近作られたのであろうか、近代的な白い石の塀の真中に、ススキた古物がある。境内に溶け込んでいるせいakaあまり大きくは見え

ないが、近ずくと流石に大きい。これが大樹寺三門である。この門は寛永十八年（一六四〇）三代將軍家光の建立したもので、楼上には「大樹寺」と後奈良天皇の勅額がかかっており、また釈迦三聖と十六羅漢の木像が安置されている。実にすばらしい門で、私の好きな三門の一つである。というのは、東福寺・大徳寺・仁和寺・知恩院・増上寺等、多くの三門に特有な禪宗建築の嗅みは全くないからである。そればかりでなくこの三門は、素朴な純日本化された建築様式で、下層と上層の間が適当で、ぐつと引きしまり、外観も頗る勝れている。知恩院の三門の上層には石川五右衛門が住んでいたとか、羅生門の二階には死人が捨てられていたとかいう怪奇な伝説があるが、それはこれらの門が人々を恐怖させるに十分な大きさを持つからであらう。けれども時間的な差はあれ、この大樹寺三門はたゞるみきつてゐる我々を緊張させるような不思議な力を持っている。

襟を正して三門を入ると、正面に大きな体を持てあました本堂がどっしりと座っており、山道石畳の両側にある数基の石燈籠は、

遠く徳川の威力を忍ぶ様でもある。スマートな数本の松が境内を飾っているのも大樹寺ならではの感を深くする。浄土宗の寺院でこれだけまとまっている寺院は少ないであろう。

三門から本堂までの距離はほんの三、四十米であろうが、なかなか本堂には行きつかない。それは右側にある鐘楼と左側の松越しに見える多宝塔が引きつけるからである。それらを後からゆっくり見ることにして無理に本堂に行こうとすると、今度は周囲にめぐらされた白亜の塀が歩をとどめる。当時の豪勢さを物語るこの白亜の塀は、すっかり朽ち果てて、世が世であればと一見寂しさにかりたてられるが、そして何とかこの塀ぐらいなおせないものかとかっかりさせられるが、落ちた壁の部分々にまた何ともいられない風情がある。それは奈良・京都に見られる古い屋敷にめぐらされている朽ちた塀のように、いいつくせない寂しさの中に、何か暖い親しさが感ぜられる。何年もの間だまって風雨に耐えて来たその姿は、何ともいえない美しさである。

本堂の横についている廊下の下は「くぐり

戸」になっている。その前に立つと異様な感じさえして来る。そして自然と「頼もう！」というような茶目な言葉さえ出て来る。しかし何といっても「許せ！」といって入る気持にはなれない。それは境内の雰囲気がいしん坊を威圧するに十分であるからである。ともかく「くぐり戸」を通ると、そこには大方丈、小方丈、庫裡とコの字型に列んでいる。

先ずは本尊様を拝観と本堂に案内された。ひっそりとした大きな本堂は美しく飾られ、中央二本の柱にかかっている「厭離穢土」「欣求浄土」の旗は、にこやかな本尊様が我々凡夫にそっと囁やいているようであり、私でさえ沢山揃っている小さな木魚のバイに手をつけた。そして律院に来たような感じでさえあった。本尊様の左側には家康の木像と、広忠、秀忠の位牌が、右側には親氏から広忠に至る八基の松平家代々の位牌と、家光から家茂に至る徳川家代々の位牌がそれぞれ厨子に入って安置されている。いづれも全く見事なものである。

大方丈は安政四年（一八五七）家定が建てたもので当寺の建築物として新らしいもので

あるが、非常にすばらしいものであり、建中寺の大方丈が焼失した今、浄土宗としては貴重なものである。襖や壁は近世日本画の復興者といわれている冷泉為恭の彩色画で飾られ、しばし我を忘れさせる。とりわけ「御成の間」は見事なもので、いざという場合の武者だまりがついている。押入れに入って主君を護るのも大変な役目であろう。

それはともかく、この大方丈の一室で、後陽成天皇の綸旨をはじめとし、数百通の古文書を拝見した私は、大名にでもなったような心地がした。その他当寺には家康が寄附した当麻曼荼羅や三尊画像等、数多くの貴重な文献が残存している。全く岡崎の片田舎に埋もれているのは勿体ないことであり、残念至極である。

隣の室には出世開運の守護神として貫木が祭られている。永禄三年（一五六〇）桶狭間で今川義元が殺された時、家康は死を覚悟で大樹寺に来た。しかし登誉天室にさとされ、七十人力の豪者といわれた寺僧の祖洞がこの貫木で群がる敵をなぎ倒し、家康出世の糸口を作ったというので、この貫木が神に祭られ

ているのである。成程頗る大きなもので、これを振り廻すのは容易でない。

現在の配給米ではとても駄目であり、別世

界のお相撲さんに頼むよりほかはない。ともかく門の貫木が神になるのであるから出世したものである。「私も貫木になりたい」である。

こんなことを考えてぼーっとしていると、何時しか部屋に灯がともされ、はじめて時間の経ったのに気がついた。切角見たいと思っていた多宝塔は諦めめるより仕方がなかった。

翌日早起きして再び多宝塔を見に出かけた。たまの早起きにお日様も驚いたか、あまりかんばしくない天気であった。段々晴れるだろうとのラジオの予報に勇気づけられて宿を出たが、常日頃に行ないはかくしきれず、大樹寺に着く頃は絹の様な春雨がしっとりと地面をぬらしていた。「春雨ちゃ、濡れて行こう」と口には出したものの。足の運びは重かった。しかしこの落胆もあつという間に消え去った。

春雨の止めどなく降りしきる中に、松の緑の枝の合間に、薄化粧をした多宝塔がほんのりと霞んで見えたからである。

それは昨日心を引かれた驚きとは別に、朽ちた塀といい、背景の竹藪といい、雑草の一本一本が、いかにも春らしく、成長し続けている姿がはつきりと見えたからでもあった。

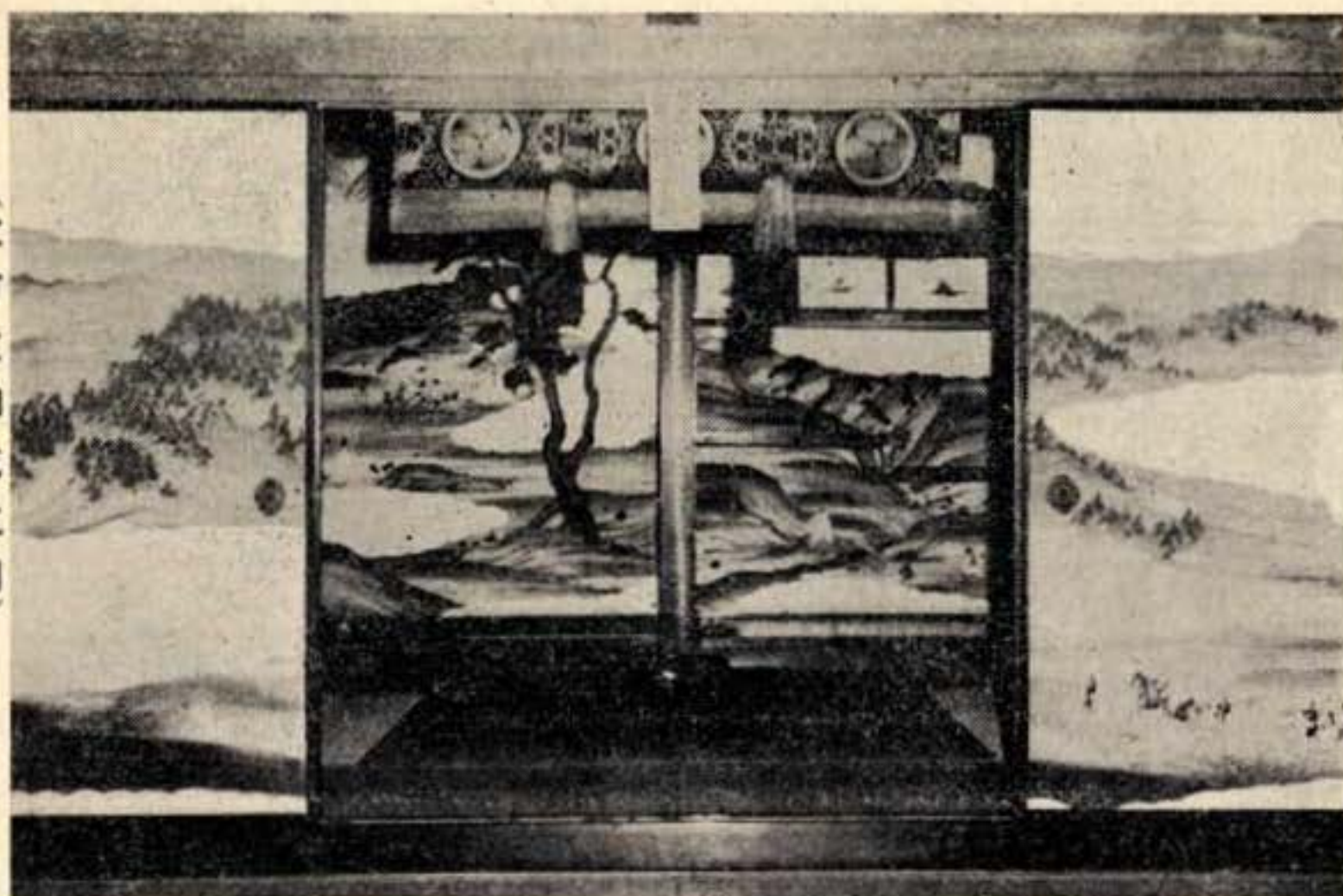
南朝四百八千寺 多少楼台煙雨中

という詩が、場所と時間の差こそあれ、自然と理解が出来、思わず口ずさむ私ではあった。辺りは雪の降る夜の様にしんと静まりかえっていた。

放射能雨を恐れたわけではないが、一着しかない服のために、そして靴のために自動車を呼んでいただいた。車に乗ってほっと一息ついた時、大方丈の玄関に飾ってあった家康の御遺訓を思い出した。それは有名な不自由を常とおもへば不足なし、心に望おこらば、困窮したる時を思ひ出すべしである。あつと思ったが仕方がない。なぜか身元をくすぐられる様であった。しかしこれも

及ばざるはすぎたるよりまされり

である、と非理窟をつけてみたが、感心した出来ではなかった。



長壽の調べ



山 城 正 隆

終戦後という言葉は、もうないのだそうである。その年に生れた子供すら、今年はいじめてたく小学校を卒業している位で、今更終戦後と前と区別してみても、つまらないことになってきた。若い人たちに戦争の体験はなし、むやみやたらに日本だけが兇暴無惨な世界の孤児だと教えられてきただけに、そんな戦前などは興味のもちようもない。戦前という言葉を考えてくれない若い人にとって、終戦後なる言葉の影のうすいのは当然である。

だから「震災後」なる言葉に至っては、すでに歴史上の言葉になってしまった。誰だっで自分の親の子供の頃の出来ごとに、興味のもちようのないのは自然である。しかし中年の人たちにとっては震災前後はまことに画期的な興味深いものがあつた。例えば当時の新聞漫画に、銀座通りを帆をあげた小舟が往来している絵があつた。これは当時の銀座が雨降りには泥海となるのを諷刺したものであつた。ゴム長靴が一世を風靡したのも、その頃であつた。私娼くつの代名詞であつた十二階下なる名前も、工兵隊の爆薬で十二階そのものが吹きとんでしまつてからは、立ち消えて

しまった。ただし中年者がいかに懐しんでも、誰も聞いてくれないのでは、震災後なる言葉が使われないのも当然であつた。

更にそれが日清日露の戦役となると試験問題にもなりかねない代物である。日露戦争をとりあつた映画が空前の大当たりだったそうだが、これも前の時代という意味からである。従つて当時の話が時代がかつていゝものも止むを得ない。例えば軍隊の炊事場で、大釜の汁をだんだん吸んでゆくと、釜の底から靴がでてきたとか、便所の扉を開けたら、中から殺された上官がころがり出たとか、嘘のようなほんとの話があつた。中でも日比谷の焼打ち事件は、内乱と同じ大騒動であつた。交番といつて、今の駐在所のような立派なものはなく、ボックスに過ぎなかったが、これを街中に引き出して燃してしまった。一方抜剣した巡査は近寄る良民の頭を割ってしまった。

昔話をする人を老人と名づける。話は身近かなものでこそ興味があるので、縁もゆかりもない話は、誰だつて御免を蒙りたい。諸君がもし「日清日露の時にはネ」と話し出さ

れたとしたら、諸君の頭はそっぽを向いて、何か他のことを考えるに違いない。ところが、私は何の因果か知らないが、日常何かにつけて、「御維新のときにはホ……」と聞かされるのだからたまらない。

というわけは、私の母が慶応二年生れ、今年で満九十二才になるからである。こう申す私ですら、古稀を過ぎてしまった。私の末っ子ですら「大正っ子」といわれていたのは昔のこと、先日訪ねてきた時には、どの重役かと思えるばかりであった。動作が鷹揚といえど体裁がよいが、実は腹ばかり出ばって拳止緩漫になってしまった。眼鏡を額の上ですり上げると、その額の上には毛がなくなっていた。こんな息子を眺めていると、私の方が淋しい気になってしまった。

その私が、そのまた母から聞かされる「御維新」の話が、すごい話ばかりなので、うんざりせざるを得ないわけである。ある町角で人だかりがしているので、前の方にわって出てみたらまさに決闘の最中だった。腰のものを引き抜いて、互に青眼にかまえた、といえど剣豪ものを思わせるが、その時の実際の光

景は、双方まっ青になって血の気がなく、二間以上も離れて立ったまま、何れも動こうとしなかったそうである。

当時はまた無警察状態で、物持ちは自衛する外はなかった。廊下の扉、部屋の入口等は錠をかけておいた。ある日、母の家にも二本差しの群盗が襲い、第一の扉を破り第二を破り、嚴重な締りを次々に破って奥の間になだれ込んできた。家族から番当から全部をしぼりあげておいて「御用金を出せ」ときた。

御維新から今に至るまで生きているのだから、母も長生きなわけである。人間の寿命が平均のびたのは、申すまでもなく医薬の革命的進歩によるものである。ところが、母はいまだかつて医者のご厄介になったことのないのが自慢である。従って母の長命は現代の靈藥のおかげでないことは事実である。

というわけか、私の住む土地

には、長命の人が多い。七十才を越した人は、別に珍しくもないし、私ごときはまだ敬老会の会員にもなれないのである。東京から一時間余りで着く所であるが、何分にも寒村の駅なので急行準急行はもちろんのこと、普



通列車すらも停らないことがある。だから注意されなかった方も多いと思うが、この駅の名所案内に「名刹○○寺」等の名称と列んで。「長寿の里」と記されている。つまり長寿の人が多いことが、駅の名所案内に載る位に特別なものであるらしい。

近頃は人命尊重の思想から、どこでも敬老精神が旺んになっている。村でも古くから敬老会の行事があつて老人を嬉ばせているが、今回は県からも敬老の行事として、八十五才以上の者に金一封と記念品が贈られることになった。

通知のあつた当日には、陋屋ながら周囲を清掃し、母は朝から髪をなでたり、帯をしめ直したりして緊張していた。やがて門前に高級車が二台も停り、大勢が降りてきた。先頭に立って来られたのが知事代理で、その後は、わが親愛なる老村長以下が随っていた。

知事代理氏は出張所の係長か何かでもあらうか、二十才の好青年で口上だけは立派であつた。敬老金と記念品を前にして、母がしきりと額を畳にすりつけている間に、県会議員代理その他の代理の皆さん方が、記念の品々を

おいては退参し、まさに儀式をみているようであつた。それがため折角用意しておいたお茶もお菓子も、代理各位に捧げる暇もなく、あれよあれよと家内が騒ぐ内に、潮の退くように御一同は自動車で帰ってしまった。

母を初め私たち一同は、県の仁政に感激して、この春は氣候のせいばかりでなく心温まる思いで暮した。いつ小寒なのか大寒なのか寒さ知らずの日々を過していると、突然県から部厚い封筒が届いた。開けてみると「老人実態調査票」とあり、沢山の項目について記入し、母自身の署名捺印が必要となつていたので、これは母が自分で書き入れる仕組になつていた。

それから一週間位して、私が外出から戻ると、母が例の実態調査用紙を私に差出して、「わたしにはよく判らないから、お前が書いてくれ」と、いつになく萎れて頼むのであつた。私はフト母の態度がおかしいな、と思つたが用紙を受取ると自分の部屋に入つた。

母は風邪を引いたり、腹をこわすことがあつても決して医者にかかったことがない。またそれですぐ治ってしまうのは、生来健康に

めぐまれているからであつた。老母に対して筋骨逞しいという形容は変かも知れないが、裸になると男のような恰幅をしている。

気が向くと、一人で鋤をかつぎ地下足袋をはいて畑にゆく。朝食前に一仕事終ることもあり、小雨位降つてもぬれたまま耕作していることもある。そのおかげで私たちの食膳の野菜は、母の手作りで間に合っている。さて私は机の上に、老人実態調査票を拡げて、それぞれに適当に記入を始めた。難しい内容ではないが、実に詳細な項目が列んでいた。家族の構成、その情況、経済上の実態、当人の嗜好にまで及んでいた。その次には敬老金の用途についての欄があつた。敬老金を何に消費したか、子供の小遣、孫の小遣、生活費、教養費等々の項目があり、要するに幾ら何の目的に使い、もし残金があるなら貯金しているか、自分で持っているかという式である。県としても多額な敬老金を支出したので、その責任上その使用ぶり、所蔵ぶりを調査するのであらうし、これを集計するのも能吏たるゆえんであらう。実のところ母は六千円也の敬老金を頂戴してから、曾孫にお小遣を二百円

奈良大安寺の如来様の

靈驗あらたかなお話

神龜四年（AD七二七年）の九月初旬に聖武天皇が奈良の山に獵に行かれた時、一匹の鹿が山里の百姓家に逃げ込みました。お百姓さんたちは、これは良いものが逃げ込んで来たとして、その鹿を殺して皆でたべてしまいました。

此の事がすぐ天皇のお耳に入ったので、非常に御怒りあそばされ、その百姓たちを召し捕えるよう役人に御命令を下されました。

これは大変と恐怖におののいたお百姓たちは、何かにすがって命だけは助けていただきたいと思いました。そこで常々伝え聞いている御慈悲深く靈驗あらたかな、大安寺の釈迦如来様におすがりしてはどうかと話しがまとまり、使いの人を頼んで大安寺に代参して貰い、お坊さんに訳を話しお経をあけて祈願して貰いました。そして、お坊さんに役人が捕えに来て朝廷にひきつれて行かれる時にお寺の南門を通ると思いきすから、南門を開けて本尊様を遠くからお

がめる様にしていただき門を通る時鐘を鳴らしつづけていたのだきたいと使いの人に頼んで貰いました。お坊さんは、頼まれた通り、南門を開いて拝むことの出来るようにし弟子に鐘をならさせ、自らはお経の転読をして祈願してやりました。一方役人に捕えられて宮中に連れられて行くお百姓たちは、南門の前で如来様におねがいをし、朝廷の牢に監禁されました。

それからまもなく同月の二十六日に、天皇の皇子様がお誕生あらばされ、天皇は非常にお喜びになり、罪人に大赦があり、そのお百姓たちは、刑罰を加えられるどころか、かえって賜物までいただき釈放になりました。お百姓たちの感激これにすぐるものはありません。これは、如来様が我々の願いをお聞きとどけ下さった御慈悲にちがいないと思い、今度は皆で大安寺にお礼まいりをし、その後も如来様を熱心に信仰したとの事です。まことに如来様の靈驗はあらたかであるというお話です。

やって、残り全部は筆筒の奥に藏ってある。

この調査の最後の欄は、無料養老院、有料養老院、老人クラブに対して入りたい、入りたくない等の五項目の設問であった。これはもちろん「希望しない」の所に○印をつけておいた。母にしても当然希望しないと考えただけで他意はなかった。

その翌日のこと、夜おそく私が帰宅すると母が玄関まで出迎えて、「あんたの気持はよく判りました」と、ていねいにお辞儀をした。私は虚をつかれた気持で驚いてしまい、急いで居間に入ってしまった。若いときから強情の一点張りで暮してきた母である。ことの如何に拘らず他人に謝ることのなかった母である。おかしいことだと青天のへきれきのように思った母の態度も、家内のいうことでやっと判った。つまり気まま一杯に暮してきた母が、九十二才になって、県から改めて養老院を希望しますかと尋ねられたことが、よほど芯にこたえたらしい。従って私が「希望しない」と記したことが嬉しかったのである。偶然のことで母を嬉ばせたのは、私にも嬉しかった。

(一)

人あり、

その世に現れることは
まことに難い。

その一人とは誰ぞ。

そは如来、応供、正覚者である。

——増支部經典——

地球上に、人間の数は多い。しかし、本当の「ひと」は少い。豊臣秀吉が細川幽斎に問うた。

「天下に最も多きは何か」

「人でございます」

「さらば、天下に最も少きは何か」

幽斎、答えて曰く

「人でございます」

その少い人、本当の人、たった一人のひと。その人の生れた日が「四月八日」である。

仏陀釈尊の降誕は、このようにして、地上に始めて真実の意味での「ひと」のあらわれたことによって尊いのである。甘茶と花御堂は人類の夢の実現である。(N)

(心)

を和むのはささいなところづかいによる。一寸したやさしい感謝を表わす言葉づかいは、相手のトゲトゲした気持をもやわらげる。このごろ、日本の社会生活のエチケットが失われて、ありがとうとか、ごめんなさいという言葉が影をひそめてしまった。ありがとうに類する言葉を商人は必要以上に用いるし、一般の人々も儀礼的にはばか丁寧に使うが、日常茶飯事は案外に使われていない。たとえば、外国語のサンキュー、メルシーダンケ、トウシェ(多謝)などは、街頭の行きずりにも、頻繁に用いられ、なごやかなふんい気をかもし出しているときく。これは、言葉が、外国語に比して日本語の方が発音しにくいということによるかもしれない。きわめて単純な感謝の意と遺憾の心を、日常軽く表現されるようになったら、身近の社会生活における、トゲトゲした感情もやわらいでもっと楽しく過せるのではないだろうか

(A)

(専)

ら近ごろの話題は、といっても、この十日に、御成婚を迎える皇太子、美智子さん御夫妻から初まつて、下旬からくり拡げられる都道府県知事以下、各議員の選挙。いやはや大変な？ 競争との事です。

だれでも、朝起きるとその日の天候を気にかけることだろう。部屋の窓にさんさんと太陽の光がさし込む上天気の日、人の心も晴朗となり、何にかその日の幸運が約束されるようである。

これが反対に、太陽が雲にかくれて、空がよどんでいたり、泣いていると、心も暗くなる。

皇太子御成婚は、憲法にうたう「両性の合意」に従って行われたフェアな組、国民の顔の天気は、さんさんとかがやく太陽のようだ。

後者の選挙は如何、いつもいつもの事ながら暗い面が多いようだ。明るい楽しい船出をしてもらいたいものだ。(T)

(称)

うればわれも仏もなかりけり
南無阿弥陀仏の声ばかりして

念仏の修業にいそしんでいた僧が、日頃の苦心の結果到達した心境を歌に よんで、師の僧に示した。内心は、得意に なって、ほめて貰えることを期待していた。

師僧は、この歌をよんで、いった。

「まだまだちや。声が残っておる」

念仏の真髓は、仏と人とが一体となつて、無心に仏の名を唱えるにある。仏の名を唱える以上、どおしても「声」を出さねばならぬのに、どおしてこれではいけないのか。僧は再び修業の生活に入った。来る日も、来る日も、念仏三昧にあけくれした。

修業がすすみ、どおやら念仏ということ が分つて来た。それでまた歌を作った。

称うればわれも仏もなかりけり

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏

師僧はこれを見て、ニッコリ笑った。(N)

(彼)

岸もすぎ、桜花爛漫と咲きみだれ
る季節になると、人びとはみなう
かれたす。しずかに春のうららを
楽しむのならまことに結構である
が、乱におち入り、他に迷惑を及ぼすにい
たっては言語道断。その原因は大かた酒な
るものが禍いしている。

西洋のウイスキーは、英語のウォーター
・オブ・ライフで「命の水」というのがそ
の語源だそうである。東洋では酒のことを
「百薬の長」と呼んでいる。酒杯をかさね
て陶然として、憂いも悩みも忘れた酔いご
ちこそ、酒を命の水とも百薬の長とも呼
ばせたものである。たしかに酒の効用は
大で、気分転換という若返りのうえにも、
また短時間で疲労も回復してくれる役割も
果してくれる。しかし、ひとたび飲みすぎ
ると、逆にグロンサンの厄介になるばかり
でなく、深酒をつづけると、肝臓はもちろ
ん、腎臓、心臓など大切な器官が変性して
いくのである。酒自身の性質は変らぬが、
飲み方一つで毒にも薬にもなる妙ヤクであ
る。

(A)

(仏)

頂面している、李承晩も、ソツの
ない岸首相も、加えて、とかく世
間で「あいつのやることは」とい
われるような世の人々に云えるこ
とだが、人間と云うものは、各自それぞ
れの立場によって、ものを受け取っているよ
うです。この事は、自分の解釈した世界に
いて、本来というより、ものの真理の世界
に立ってないからなのでしょう。

仏教の教えの中に、「一水四見」という
言葉がある。これは同じ水でも、魚はわが
家と見、餓鬼は火と見、人間は水と見、天
人はルリと見るといふ例えです。

他との本当の融和もなり立たず、結局、
自分の意見ばかり無理押しをするという結
果になって、対立はいつになってもなくな
らない。

自我がを押し付けるだけでなく、人の意
見もたまには聞いたらいいたくなります
「教えをひろめる」ばかりでなく「教えを
聞く」立場に立って見ることもあるだろう
かじっくり反省してもらいたいものだ。(T)

近代高僧伝

武田芳淳伝

西三河には今に於てさえ、律風がただよっている。それというのも徳巖が中山貞照院に住し、伊賀に昌光寺を開いて律制を布き、大乘律苑としてより以来のこと、捨世派の徳川行者も三河に来たが、その弟子の徳住は荒井山に九品院を建て、捨世の風儀を高揚し、浄土律捨世の風は三河においていやが上にも高まっていたのであった。明治の世

の、そのかなわぬことを悟り、律院の生活ができなければ、服装だけでも僧風を維持したいものと、鼠色の法衣を常にまとうことにした。そのため「武田鼠」の異名をとったということである。彼の外、大鹿愍成・大門了康・桑門秀我の諸師も愛知支校在職時代には鼠色の法衣を用い、心ある僧達の流行ともな

屋建中寺の塔頭正信院より招かれて住職となつたけれども、同九年五月学問を志して東上し増上寺山内の安立院に設けられていた大学林に入学して、義応や龍成について宗余乗を学び、同十二年二月には京都に遊学し、泉涌寺の佐伯旭雅の講筵に列して性相の学を究めた。性相とは唯識及び俱舍の教学のことである。同二十年十二月には片原一色善応寺に住して教化を布くと共に、翌年には愛知支校長となり、同二十二年には宗会議員に当選して副議長となった。時恰も宗制改革後のこととて多難な問題も山積したが、よく時局を收拾して議長を輔けて重責を果し、同二十四年九月には愛知大教会の会長に就任し、十二月大森寺に転住した。同三十二年には校長の職を辞し、翌三十三年一月宗務執事となり、布教部長に補せられ、その十二月には敦賀西福寺の住職となった。

に、愛知県には浄土宗の教校が置かれた。現在の東海高等学校の前身に当り、浄土宗学愛知支校と呼ばれ、片原一色善応寺の一代から出でて、明治二十一年十二月初代校長になったのは武田芳淳であった。芳淳三十五歳の時のことである。彼は律院の風儀にあこがれ、一時は律院に入って修行を夢みたというもの

芳淳は安政元年（一八五四）二月二十九日、尾張国中島郡朝日村蓮池に生れ、父を武田金兵衛といった。幼名は仲太良。文久二年（一八六二）九月大森寺の章誉赫淳を拜して得度し、師の寂するに及んで、明治二年十二月より三ヶ年の間、善応寺の交誉説応に教養せられることになった。同五年五月には名古屋

西福寺は北陸地方きつての浄土宗の名刹で。草創のそもその始まりは、法然上人御在世の砌り勢観房源智が北陸勸化の師命をうけて、草庵を結んだのに起源があるという。

その後良如が近江路より敦賀に
来錫の折、奇瑞を得て正平二十
三年（一三六八）八月一字を建
立したのが、西福寺で一条派の
本山である。西福寺在住中新座
敷瑞芳軒一棟を建立したが、芳
淳はどのような原因があったか
は知るに由ないけれども土木建
築にかけては一見識を有し、彼
の手によって建立されたものは
枚挙にいとまのない程であつ



た。即ち明治二十一年には宗学本校及び愛知
支校の建築委員長となり、同三十年三月には
神谷大周外二十三人が発起人となって日清戦
役における戦死病死者の英霊をとむらわんが
ため愛知三重岐阜静岡四県下の浄土宗寺院並
びに檀信徒の浄財で、仏教忠魂祠堂の建築を
計画された時にも、推されて建設事務局長と
なった。翌三十一年には専門学院建築委員長
となったけれども、会心の事業は知恩院の阿
弥陀仏殿の再建ではなかったろうか。

阿弥陀仏殿は一に阿弥陀堂とも言ひ、初め

は山上の勢至堂の前にあつたが、宝永七年
（一七二〇）時の住職応誉円理はこれを山下
に移し、御影堂の西南に東面して建てたので
あつた。しかし何分にも永正十四年（一五
七）十二月、東福寺の境内にあつた万寿寺の
堂宇を移したという由緒はあるものの、腐朽
が甚だしいので明治十一年十月取りこわして
しまった。以来再建の挙はあるものの、財政
難の知恩院としては此の再建は思いもよらぬこ
とであつたが、法然上人の七百年御遠忌を期
会に建築の業は急速に進んだのである。即ち

同三十六年一月芳淳は知恩院事務長となり、
兼ねて阿弥陀仏殿再建委員長に推され、十一
月二十日起工し、一時日露戦役のため工事は
中止されたけれども、七ヶ年の歳月を費し
て、橙一色の精巧なる材料と奇巧巨麗の技術
をつくして、四十三年四月竣工を見たのであ
つた。このように建築に非凡の才があつたの
で、人呼んで「木工の頭」と言つたという。
「武田鼠」にしても、「木工の頭」にして
も、かかる異名をとられたということは、如
何に彼の信念が強固であり、建築の素養が深
かったかということを知る一証左でもあろ
う。

同四十四年七月三日上人は病床に臥し、同
月十三日示寂せられた。時に五十八歳、法名
は法蓮社善誉上人阿如実芳淳大和尚。管長
は生前の功を賞して正僧正を贈られた。又上
人は書を善くし、就中草書は巧みであり、残
された和歌も尠くない。

山寺の心静かにすみぬれば

水の音にも法や説くらむ

（大橋俊雄）

随想

手を繫ぐ子等



安藤正男

久し振りに日銀国債局に出かけた私は、一年前に比べると大変行内の明るくなっているのに驚いた。周囲の壁も純白に塗り代えられ、銀行特有の高い天井には、螢光灯がむしろ明る過ぎる位に輝いている。充分にスペースを取った間じきりには事務机が整然と並べられ、女子行員の操作する計算機の音丈が単調なしじまを破って聞えて来る。部屋の隅に設けられた電気湯沸器には熱湯が沸いていて、何時でも自由にお茶が飲め、それをすすりながら皆んな待合室の長椅子に自分の番を待っている。部屋の中の明るさと、暖かさとを感じ乍ら、私はふと、何時か見た週刊誌のグラフの事など想い出していた。それは日銀

紹介の組写真で、その中の一枚は毎朝の九時、日銀開店の模様で、守衛が昔ながらの拍子木を叩いて巡回している、尤も長い間の伝統的なしきたりなのであるが、現在のこの機械化された速さと明るさに比べると、私には一寸面白い対照に思われるのだった。

私がそんな事を考えている時、どやどやと入って来た男女の一群があった。見るといづれも高校生位の年輩で、然も目の不自由な人達ばかりである。恐らくは盲啞学校生徒達のものである。私は席をゆづって片隅にたたづんだ。俗に眼は心の窓と言うが、光彩を失った両の瞳はひどくその容貌を暗くする。若し両眼が健全であつたならそれ

仏教ものしり帳

袈裟 けさ。染色衣。離塵服、間色衣、無垢衣、功德衣等ともいい、出家の正服、インドでは食用にならぬ草木の皮や葉をとってそれで赤濁色にそめ、俗服と区別した。九条衣(大)七条衣(中)五条衣(小)の三あって比丘の三衣といって、インドではこれ以外に僧は衣服を持つことは許るされず、隨時重ね着をしてすごした。支那や日本では季候の関係で下に衣服をきてその上に袈裟をかける。小衣は段々簡略になって輪袈裟となった。

各宗によって色々の様式に変化したのが、いづれも多くの小片れを縫い合わして作る。これは仏陀が僧侶は質素を旨とすべきをさとされて、大きい布地は他のものには使用出来るから用いず、使いものにならぬような小片れを無数につづり合せて、一枚の袈裟に作られた古事によるものである。浄土宗では、更に法然上人の主旨として、他宗のような華美な、大きいものでな

ぞれ美少年、美少女と思われる人達でも、ひとたび双眸を閉じてしまうと一抹の空虚さが漂い、澆刺とした若さ迄も失われてしまうようだ。然しよそ目には心から哀れさや同情さを禁じ得ないそうした人々も、矢張りその胸中は涯しない知識欲に燃えているのであるう、守衛の説明に熱心に耳を傾けている。

「一口に言って日本銀行と言う所は……皆さん御存知の普通銀行がありますネ、その銀行の親銀行のような所です。あそこに三番の窓口がありますネ、見える方はどうぞ起って御覧下さい」

守衛の説明を聞き乍ら十二、三名が起ち上った。残る十人余りは余程視力が弱いのであるうか、椅子にかけたまま静かに説明に聞き入っている。その中の一人、前列の一少女はしきりに灰皿のセットをまさぐり、その形態や色彩迄も知ろうとするかのように、繊細な指先が這い廻っていた。一般事物に対する執拗な迄の探求心もさる事乍ら、それは常人に比較して大変な努力の要る事であろう。然し失われた五官の一つを補うべく、他の器官が卓越して働くならば却って目覚ましい発達を遂

げるのではなからうか。曾って来日したヘレン・ケラー女史などはただ努力のみにより、その課せられた三重苦の難関を克服した一人である。尤もそれには献身的なよき協力者の居た事も否めないが。

昔の句に、

番町で眼あき盲に道をきき。

と言う川柳があるが、塙校が開講中蠟燭の灯が消え、かえって目あきに同情したと言う。又故宮城道雄氏の幽玄な箏曲を聴く時や、哀調聞く者の肺腑に響く綾太郎の名調子に酔う時など、そのいづれもが「音」の世界に「心の窓」を開いていたのではないかと思う。

とりとめもなくそんな事を考えている中にも守衛の説明は終って、生徒達は次のコースに起ち上った。二人一組に固く手を繋ぎ合つて、視力のある者が静かに先導して行く。

神は平等であり、天は公平である。光りを失ったそれ等の人々に、倅は又違った道が訪ふて来る事であろう。私はそう祈り乍ら何時迄も後姿を見送っていた。

く、木欄染めの、「大師衣」という、ほんの形丈けの袈裟をかける。肩からかけて全身を包む七条袈裟、九条袈裟は余程の儀式の時だけで通常は胴のまわり丈けにまとうこの大師衣を用いている。在家の方も、仏前に出る時だけはせめて輪袈裟と数珠とを持ちたいものである。

頭陀袋　ズブクロ、三衣袋、衣囊、打包ともいう。僧侶が旅をする時、三衣が塵によごれぬように入れる袋。三衣というのは法衣と袈裟と坐具とをいい、僧侶はこれ以上のものを持つことも着ることも許るされなかった。最底限の衣類のことである。人がなくなった時、その首に袋をさげてこれに六文銭を入れてやるのはこれから転じたものである。

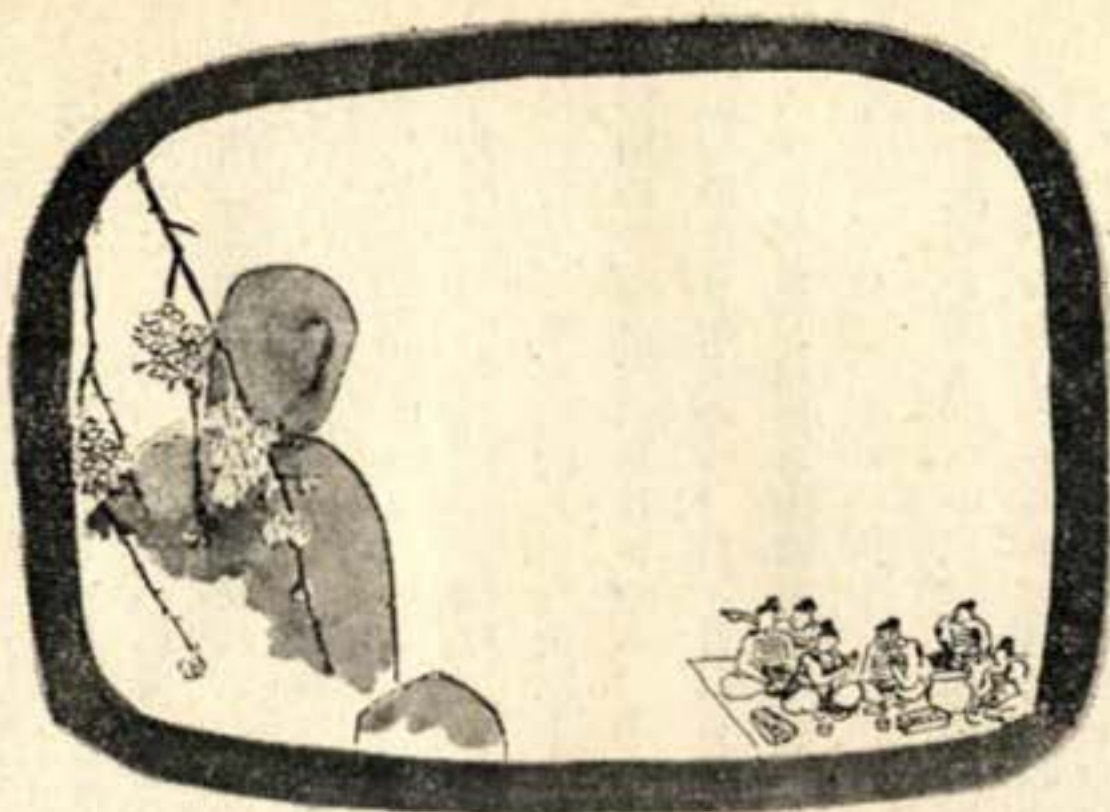
払子　ホッス　払塵ともいい、一束の獣の毛をたばねてこれに柄をつけ、蚊虫等を払うもの。現在の寺院で儀式の前に導師がこれをふるのは、これが儀礼化したものである。インドは熱帯で虫類が多いが、これを叩いたり殺したりすることは禁ぜられているので、毛で軽く払うのである。

さくら寺の

のんき地蔵

伊 東 拳 位

絵・加 藤 金 一



今からおよそ五百年ばかり前の話です。都は（京都）戦が十年もつづいて、めっちゃめっちゃになってしまい、人々はずいぶん、めいわくして、苦しみました。この話はそのころの話です。

東方の方の宇沢大将が、或る寺に陣をかまえていました、西方の方の鳥山大将の軍勢が、不意に押しよせて、この寺を攻めて、寺を焼き払ってしまいましたので、宇沢大将は、二百メートルばかり、逃れて陣をしきました。

りっぱな寺の建物は、趾型も無く焼けて、あとは土台石と、お地藏様、それにその側の、さくらの木が一本、残っただけでした。

鳥山勢はそこから、二百メートル位はなれ、両軍は四百メートルばかりへだてて、向い合って、陣をとり、矢を射かけたり、斬り合に出たりしておりました。

ところが困ったことには、此のあたりに、水が無いのです。呑むことのできる良い水といえ、焼け落ちた、お寺の境内に、良い水のわく井戸があっただけです。或時東方では、兵「隊長、水がなくなりました」

長「ではくんでこい」

兵「この辺にはありません」

長「どこかにないか」

兵「ありません、あるのは寺の井戸だけで、他にはどこにもありません」

長「そうか、では二三人行って、寺の井戸から汲んでこい」

そこで三人程の兵が、手桶をもって、陣から出ていきました。是を見た敵の兵は、

西「オヤー 敵が出てきたぞ……あっ桶をもってる、ハハア水汲に、あの井戸へ行

くんだナ、よし射てやれ……」

水くみに出てきた兵の処へは、たちまち矢がはげしく、飛んできました。おどろいた三人は、桶もそこえ投げ出して逃げだしました。

「アッハッハッハ……逃げてったぞ」

「桶も何もなげ出して、ゆかいゆかい」

敵の方は大笑しましたが、しばらくするとこんどは、西方の方が水がなくなりました。

兵「隊長水がありません」

長「どこかで汲んどいで」

兵「どこにも無いのです。あるのは、あの寺の境内にある井戸だけです」

長「では五人で行って汲んでこい」

そこで西方の兵が桶をさげて出ました、これを見た、東方は

「この間の仕返しだ、それやれ……」

とさかんに矢を射かけてきましたので、これもおわてて、自分の陣へ逃げ込みました。

兵「隊長だめです」

長「よし、それでは兵を五十名出して守ってやろう」

ここで五十名の兵が守って水汲みに行きました。すると東方からも出てきて、はげしい戦

になり、両軍共、何人かの戦死者や、怪我人ができ、ようやく水を汲むことができました。

こんな事が何回もくりかえされ、水汲のたびに、何人もの戦死や負傷者が出たので、両方の大将たちも考えました。

「わずかな水のために、こんなに戦死や負傷が出たりしてはつまらないことだ」と、お互に使いの者を出して、相談した上、水汲みを出す前には、お互に赤い旗を振ってあいずとし、その旗を振ったら、水を汲んで帰ってくるまでは、お互に矢を射たり、攻めにいたりしないことと決めました。

それから後は水を汲みに行くのは安心で、のんきに行くことができました。

井戸のそばには「お地藏さま」が、おまつりしてあり、少し高く成って、なかなか景色のよいながめです。

此のころでは、水汲みは、たのしい仕事の一つとなり、時々は敵と一しょになることもありました。

それは春の始めのある晴れた日のことでしたが、その時も丁度両方の者が一しょでした。

○「やあ又いっしょになりましたね」

×「今日はいいいおてんきですね」

○「さあどうぞお先へ」

×「いやお宅の方が先ですからどうぞ……」

○「じゃあ……」

水を汲みおわるといっしょに休みました。

そばのお地藏さまを見ると、とてもやさしいお顔をしています。

○「おお、これはいいいおちそうさまだ」

×「これは、私たちの陣にしていた寺の、門を入った所にあつたのですヨ」

○「そうですか、ちょっとお参りしましゅう……どうぞどちらの人々にも、けがや、まちがいのないように……」

×「こうしていると敵も味方も、ありませんね」

○「人間がお互に殺し合うなんて、ばかなことですね」

お地藏さまの、何ともいえないやさしいお顔は、人々の心までもなごやかな、やさしいものにしていくようです。

×「オイ矢を敵にあたらないようにやれよ」

○「敵の方へやっていけなければ、味方の方へやるのか」

×「馬鹿をいうな、味方へやられてたまるものか」

○「ではどこへ射るんだ」

×「空だ、空だ、空へ射るんだ」

こんなわけですから、戦はずい分、のんきなものになってしまいました。

それは春のある日のことでした。今日も両軍から、井戸へ水汲みに行きました。見るとお地藏さまのそばに、たった一本残っていたさくらの花が、だいぶふくらんでいました。

×「やあ是は美しい」

○「花は氣候を知っていて、戦争があつても時がくれば、咲きますね」

△「花から見たら、殺し合いなどする人間が、馬鹿げたものに見えるでしょうね」

□「もう戦はいやになりましたヨ」

×「ゆっくりお花見がしたいものです」

○「早くそうなるといいですねエ」

△「あまりおそくなると叱られますヨ」

□「では帰りましょう」

一同「さようなら」

こんな具合ですから、両方の兵の戦は、少しも力が入らず、ただ敵の方へ向つてい

俺はどこへ行つた

昔、悪僧がいて、悪事を働いて役人に捕えられた。一人の下役人が、命ぜられてこの悪僧を都の役所へ連れて行くことになった。

途中、宿屋につくと、悪僧は、

「お役人さま、あなたはお酒が大好きのようですが、召上りませんか」

ときいた。役人は

「酒は好物だが、金がないのでのめないのぢや」

と答えた。

「お金ですか。お金なら私が持っています。牢屋に入れば、金など不用ですから、あなたに差上げます。どうか充分にお酒を召上って下さい」

悪僧が、しおらしげにそういうと、役人は

「それはありがたい」

だけで、合戦に出ても、誰一人、手がらをたてて帰る者もなければ、満足に矢を射る者もありません。

とばかり、早速、悪僧のふところから財布をとり出して、酒を買って浴びる程飲んで酔いつぶれてしまった。

これを見すました悪僧は、まず、自分の縄を解き、剃刀を借りて、役人の頭を剃り役人を自分の代りに縛つて、逃げてしまった。

翌朝になって、役人目をさましておどろいた。

「これは……」と、頭に手をやってみるとクリクリ坊主、体をみると、いつの間にか法衣をきている。あきれてひとり言に「オヤオヤ、坊主は確かにここにいます。

して見ると、俺は一体どこへ行つたのかな」と、不思議そうな顔をしたとのことである。何だ、つまらぬ話だといわぬこと。これによく似たたとは、毎日、経験していることである。自分というものをしっかりとつかまえていない。私共凡夫のいつわらぬ姿なのである。

このようすを見た大将は

「これは、あまり長く戦っていたので兵が疲れたのだろう」

と思いました。そこでみんなにようすをさぐらせると、お地藏さまのやさしいお顔や、さくらの花のふくらんだのを見ていると、戦うことがいやになり、人を殺す気になれなくなったことなどがわかりましたので、ある時西方の鳥山大将は、家来と一しょに、水汲み



の中にはいって、お地藏さまや、さくらを見に行きました。そしてお地藏におまいりし、その、やさしいお顔を見ると

大「なるほどこれはよいお顔だ、このお姿を拝んでいると、争うということが、みにくい、いやなことだということが、身に感じてくるようだ」

と思いました。そしてそのそばの、今まさにひらこうとしている。さくらの花を見ると、ますます戦がいやになりました。そして自分の陣へ帰ると、早速そのことを、宇沢大将の方へも知らせ

「もお互に戦を休んで、お寺の焼け残った一本のさくらの所で、花見をしないか」

といいました。

宇沢大将も、自分の軍勢が、すっかり弱く見えてきた所なので、すぐにさんせいして、両方の軍がいっしょになって、お花見をしました。

合戦のさいちゅうに、敵、味方が共になってお花見をするなどという

ことが、味方の総大将に知れてはたいへんですから歌を唄ったり、大さわぎをしたりはしません。が、両軍のものは、仲よく一日を、たのしくあそんで別れましたが、もう二つの軍は、まったく戦う気は無し、両軍とも大将たちの本国へ、引きあげてしまいました。

やがて世の中がまったく治まった時、この二つの軍の人々は、

「私たちが、無事で国へ帰れたのは、戦うという気もちを無くした、お地藏さまとあのさくらのおかげだ」

というので、焼けたお寺が、建てかえられる時、この二つの国の人々が、お互にさくらの木を寄附して、此の寺の境内に植えましたので、その後はこのお寺は、さくら寺と呼ばれて、さくらの名所となり、又、あのやさしいお顔のお地藏さんは、敵同志が、のんきに話し合うような心を養ったというので「のんき地藏」と呼ばれ、願い事をかなえて下さる仏さまとして、尊ばれるようになりました。

(了)

人生の夜明け

須藤隆仙



人生の夜明け

かたみとて はかなき親のとどめてし

この別れさえ また如何にせん

勢至丸と別れる時、母秦氏はその悲しみを

こう歌に託した。

「袖にあまるかなしみの涙、小児の黒髪をうるをす」と古書の名文が伝える如く、今は比叡山に登り専心修行を志す勢至丸と、「有為のならいしのびがたく、浮生の別れまどいやすく」と悲しむ母親秦氏との悲しい別れの場である。この勢至丸こそ実に幼き日の法然上人であった。

さて上人の御誕生から話を進めてみよう。

法然上人は今から八百余年前の長承二年

(一一三三)美作国にお生れになった。美作

というと今の岡山県である。父上は漆時国、

母上は秦氏、その家柄は皇統五十四代仁明天

皇の流れをつぐと伝えられ、美作の久米南条

稲岡に住し、久米の押領使という役目で、今

でいう警察署長のような地位であった。

上人の生れた日は四月七日、ちょうど

正午に御出生されたといわれ、この日漆家の庭の棕の大樹に二つの白い幡が流れかかった

という奇瑞が伝えられている。

漆家では子供がなかったので神仏に祈願し

て秦氏がカミソリを呑む夢を見て懷妊された

という。信仰の御因縁による御誕生である。

上人は幼名を勢至丸といわれた。大變御聰明

で、小さい時には西の壁に向って手を合せる

所作を時々なされたといわれ、信心深い御家

庭に育たれたことが想像される。

さてこの勢至丸御年九才の時、思いもよらぬ大難が到来した。父時国公が源内武者定明なる者より恨みをうけ、夜討ちにあったからである。

この時勢至丸は小さな弓に矢をつがえ、物かげから定明の眉間を射ったといわれ、ために幼少の上人は「小矢児」と讃えられている。しかもそのために定明等一党は退散したと伝えられ、小さな勢至丸は勇敢にも父上の危機を救ったわけである。

だがこの時の疵がもとで父時国公は死亡してしまった。目を落す前、勢至丸を枕もとに呼んで「敵を恨んではならない。恨みにむくいるに恨みをもってすれば、恨みはいつ迄もつきるものではない。もし真の仇討ちがした

かったなら、出家して偉い坊さんとなり、自分の菩提を弔い、又世のため、人のためにつくしてくれ」と遺言されたという。

この遺言によって勢至丸は出家されるのである。思えばこの不慮の大難こそ上人をして出家せしむる第一歩となつたのであり、奇しき因縁だったわけである。

こうして上人は始め叔父に当る観覺得業かんかくとくごうという坊さんの所にあづけられることとなつた。ところが得業は勢至丸の余りに聰明なるに驚き、とても自分の所では充分をつくすことができないので、京に出して立派な学僧に指導してもらうことを思ひつたのである。

勢至丸も勿論非常にそれを喜び、遂に得業の紹介で比叡山の持宝房源光ちほうぼうげんこうという師僧につくことになつたのである。得業は源光への紹介状の中で「大聖文殊像一体だいせいもんじうゑいつたい」と記したといわれ、いかに上人が幼少から秀でておったかが物語られているのである。

かくて冒頭に述べた如く母秦氏との悲しい別れとなつたわけである。

しかし、思えば、この悲しい別れこそ、実に上人の御一生を決する大事な人生の岐路の

決せられた時だったのであり、洋々として前途の開けゆく人生の夜明けだったのである。時に上人御年十五才と伝えられている。

求め得る悩み

源光のもとについた勢至丸は、ここでもその余りにも聰明なるを驚かれ、いくばくもなくして功德院の阿闍梨皇円あけりこうえんのもとにおくられたのである。そしてここでいよいよ髪を剃り落し大乘戒をうけられ、真の出家の生活に入られたのである。

ここでも又、その秀逸ぶりは皇円を大いに驚かしたのであった。遂に皇円は「将来天台の座主となられよ」と進めたほどであったが名利のために学問をしているのではない上人は、このような噂の立つのをきらい、静かに本当の修学のできる所を選ばれたのである。これが同じ叡山の中の西塔黒谷に住む慈眼房じがんぼう叡空のもとであった。時に御年十八才、以来皇円のもとを辞して叡空のもとで修学することになつたのである。

叡空はこの秀才のお弟子を非常に喜び、「法然道理のひじり」と歎じ、『法然房源空』と命名されたのである。法然道理とは宇宙自

然の道理（法則）である。上人は実に名利を捨て、真の学問を求められた自然道理の求道者であり、当然成るがままの生涯を無理なく進まれ、しかも法然道理たる大念仏の真理を開顕されたお方であつたが、その「法然」という名は叡空の「法然道理の聖」という感激から生れたものだったのである。又「源空」とは先の師僧の源光の源と、叡空の空をとつたもので、この叡空の命名たる法然房源空は、一生を通じて変らざる上人の御名となつたわけである。

この黒谷での生活は実にきびしいものであつた。あの老大な一切経を数遍読まれ、しかも師叡空とは大いに議論し、果ては更に修学のため、諸国の学僧を巡歴している。一体上人はどうしてこう強く出家求道の途を血歩されたのであろうか。それは一口にいえば叡空の言葉の如く『法然道理の』（極く自然の道を進まれる）『聖』（宗教的偉人）だったからということができる。これは少し逆説的に聞えるかも知れぬが、極く自然の道（法然道理）とは、いいかえれば「宇宙の大真理」としての道である。先に「成るがままの生涯を無

扉の御法語

宗祖上人は、どんな人が、どんな質問をしても、決してこれを侮ったり叱ったりしません、いつも温かく迎えて下さるので、愚人は愚人らしい心の悩み、ほんの僅かの疑問でも、宗祖上人に遠慮なく尋ねることが出来ます。そして「それもよいのだよ」とまず肯定して下さって、「往生せんともひて、まことしく念仏申さんのみぞ大切なる」と諭して下さいます。扉の御法語も同様で念珠を持ってよし、持たずともよし袈裟をかけてもよし、かけなくてもよしと申されています。

このような御法語は常に接することが出来ますが、その度に、だからといって宗祖上人の有難いお言葉に甘えて安易になつてはいけないと知らなければなりません。

この御法語は「元強盜の張本なりし教阿に示す御詞」の終りの方に出ています。が、無慚な過去を持つ教阿に心の底から溢るる温情で手をとるように教えておられます。そのお教えの結論として、この御法語があるので、最初から教阿に対し、寝ながらでも座っていても、何んでもよい等といわれているわけではありません。

「念仏はやすき行なれば、申人はおほけれども、往生するもののすくなきは、決定往生の故実をしらぬゆへなり」とまず注意されて、

「かざる心なくして、まことの心に申すべし」と教えられています。

更に言葉を続けて、こう申されています。無心の赤ん坊とか犬とか猫とか、要するに感情的な交渉のないものに対しては「かざる心」はありませんが、同輩先輩はもちろんのこと、妻子に対しても「かざる心」がおこります。人として止むを得ないことは申せ、だからといって社会から切り離れた生活のできるわけありません。

「かざる心」のないお念仏の第一歩は、夜も寝静った頃に独り起きて、見てる者もなし、聞いている者もない所で、心静かにお念仏を唱えることです。このようにすれば「百遍にても千遍にても、多少ころにまかせて、申さん念仏のみぞ、かざる心もなければ、仏意に相応して、決定往生はとくべき」と申されています。

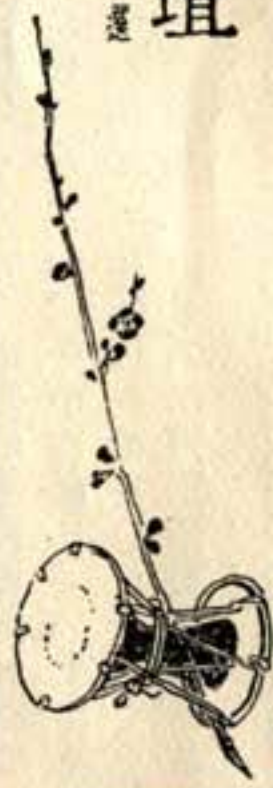
と申されています。かくて「かざる心」をなすことができれば、朝でも昼でも夕方でもいつでも「まことの念仏」が申されま

理なく進まれ」と述べたが、上人にあって「成るがままの生涯」とは実にこの宇宙の大真理への探求の道であり、「無理」なくとは、そのための「血みどろの姿」である。法然道理の聖であればある程、その道はけわしく、その求めはきびしかったことであろう。それは既に名利を捨てて皇円のもとを辞しことに始まり、「法然道理」という叡空の感歎の言葉に決せられている、といってよいであろう。黒谷での生活は実にこのきびしい求道（真理探求）の途であり、「法然道理」であったところこそ、上人の真の「血みどろ」がうかがえるのである。それは真理そのものがきびしい現実だからでもある。

法然道理であった上人であればこそ、嘘はできなかったのである。真に万人が救われる道、理窟や觀念だけではなく真に、本当に救われる道、それを求めて止まなかったのである。きびしい現実が真理そのものであれば、そのきびしさを救う現実も又、真理そのものでなければならぬ、こう自覚されたところに、上人の偉大さがあり、それだけ求め得る苦しみも大きかったのである。

浄土歌壇

岩野喜久代 選



天

鹿兒島 大照寺 常

疑はず氷原に犬を生かしめし同じ
力に守らるるわれ

評 南極の暗黒極寒の中に犬は

生きてゐた。その不可思議
な大きな力を私もうけて生
かされてゐるのだと感謝し
てゐる信仰の表白である。

番

東京 上野 常弥

目路はるか制止されたる並木道さ
やけし朝の法話きくべく

評 美しく刈りこまれた並木道

を通して、朝の法話をきき
に行こうとする作者の清々
しい感情が出てゐる。

人

東京 赤平 ウメ

九官鳥医者に飼はれて「お大事
に」われ養はば何と云はせん

評 面白い作。医師の家の九官

鳥は患者に向つて「お大事

に」と云うセリフを仕込ま
れて囁つてゐる。さて私が
九官鳥を飼うことになつた
ら何と云はせようかなと皮
肉とユーモアを交へて歌つ
てゐる。

神奈川 藤 沢 充

あまたある燈明のうちまたたきて
落付かぬ灯よ須弥壇の前

大阪 木戸 幸二

二十年のキリスト教すて仏授戒う
けて亡き子のあとを継ぐかな

東京 二宮 綾子

ビルディングの間に未明の空澄み
て大寒の朝日痛く鋭し

鹿兒島 向田 君江

一つ一つ千体仏を拝みつつ亡き弟
のおもかげ求む

島根 渡辺伊都子

静かなり父のみ墓にぬかづけば夕
餉のけむり麓より立つ

東京 田 坂 豊

てのひらに仄かにぬくみ残れども
はや物云はぬ父となりぬる

東京 水町 園子

伊豆の春梅三分咲き紅梅も梅園に
咲く初姿かな

小田原 金子 フミ

佗助の一輪寂としづもりて初釜の
席ひきしまり見ゆ

兵庫 白岩 美子

ひよこらもそれそれ性を持ちをり
て小さき一羽が常にあと追ふ

名古屋 中村 磯江

五人の子らにかまけてこの日ごろ
忘れじとはなく忘れにし母

東京 中川きよし

クリスマス・パーテイよりの風船
を孫のためにと持ちて帰れる

青森 向井 きつ

商魂はまづ清潔といふごとく暇さ
へあれば掃除する叔父

沼津 小野 徳司

不幸なる友も多しと妻告げぬ同窓
会のありし日の夜

東京 家田 冬子

羽衣の三保の松原きて見ればまこ
とに富士は大空に立つ

名古屋 郷前 泰子

年老いし尼僧が住める草庵も今日
は甘茶の降誕会かな

川内市 小島 時子

眼とち朝の祈りを捧ぐれば明るき
光流れ込むなり

東京 山田 キヨ

晩秋の晴れてうつくし葉鶏頭小部
屋にさしてミシン踏むかな

東京 前橋 千代

部屋の窓ひらけばはるか冬の空の澄
みたる果てにわかき富士見ゆ

富山 荻生 きん

孫見んとバスにゆられし冬枯れの
キャベツ畠に虹あざやけし

高岡 山元 安子

悔のなきわが半生をおくらんと心
に誓ひ年をむかへし

高岡 星野 多美

大方の葉のなき初冬寺に来て思は
ぬ紅き楓眺むる

富山 矢島 好夫

山を越え野越え川越え汽車は行く
人の愁ひを下すことなく

高岡 宅見緋沙江

古き師の訃報手にして撫然たり秋
に逢ふべく約束せしに

福岡 吉末 林堂

暴落の在庫の品を山と積み熱湯を
のむ思ひして売る

投稿規定 官製はがき一回二

首以内とし、「浄土」編集

部歌壇係あて住所氏名明記

の上送ること。

勸募日記 (三)

お寺の種類には、本山、檀林、紫衣地、別格地、能分地等、いろいろの階級がある。その中、檀林(だんりん)というのは、その昔、浄土宗の三祖記主禪師が、関東方面を教化されたところに、その源をたづねることができ

る。その関東十八檀林の一、無量山伝通院寿経寺は、了誉聖罔上人の開基にして、いくたの高僧を輩出した名刹である。歴史の流れは多かれ少なかれ、かつての寺運盛んなりしころより、その寺観を變貌しているが、しかしその面影はいまでもうかがうことができる。現住職、大河内隆弘僧正は、名刹に相応した円満な人格の持主であり、現在、淑徳学園理事長、浄土宗教育資団理事長として活やくされている。早大史学科の出身ときくが、なか／＼ユーモアを解する人で、宗門にはめづらしい幅のひろい人である。一昨年、中共

を訪問、曇鸞大師によって仰がれる玄忠寺に詣で、三師御影を贈りて日中文化交流の使命を果して来られた。また、法類、系類の大家でもあるときく。

つぎに訪れたのは、現在財務部長、望月信道僧正の御自坊、円勝寺である。いま更、僧正のことを御披露するまでもなく、前東京教区長として、その名は古くそして有名である。何といっても浄土宗聖典編纂の偉業は、宗史上にすえ永くその名を留むることであろう。最近、聖典も改訂されて再版されたことはまことに慶ばしい。教学、布教、出版等に理解のある僧正のこと、宗門復興もそれ等の拡充のために大いに現職よりの助成を期待したい。望月師が七十九歳の堂々たる老軀をひっさげて、宗門のために働かれています。その古巣に、いまは盛りの体軀にものをいわせ活やくしている人に戸田恭善師がある。自

坊は蓮光寺、東京教区会副議長としての敏腕はかわれているし、また幼稚園の経営者としての才もあり、教区としても、中堅的存在である。本会にも特別の助力を賜っている。

何といっても、東京は大教区だけあって多士才々、宗教家、社会事業家、学者、布道家等、いづれの分野に人をもとめても、なか／＼、人材は豊富である。いま布教師にその人を見る

と、教区にとどまらず、宗門の中堅的指導者として、まづ挙げることのできる人に、谷部禪雄師がある。東京教区教化団副団長として、本山布教師会常務理事としての才腕は高く評価され、最近はまだ、大本山増上寺庶務部長として、布教伝道の面よりの本山復興に参画している。今後師によせる期待は大きい。

たび／＼いうように、宗門の復興は教学の興隆が先決であることは言を俟たない。もとよりその教学は単なる知識のよせあつめであつてはならない。生命のかよつた学問であり、信仰の

裏づけになる教学が要求される。私たちが訪れた。昌清寺住職、服部仙順師は、宗学の大家ときく。浄土学を専攻され、卒業後もずっと檀徒教化のかたわら、宗学研究に精進されている。教化の方法も、經典を配布して、独特の指導で檀徒の信仰面を啓発して居られる。宗学の面より実際の指導性を示していただき、清新な寺檀関係を確立していききたいものである。

東京の犬猫の寺と有名なのに西信寺がある。住職、栗本俊道師、いま更申すまでもなく、宗門のリーダーというより、全日本仏教界の最高の指導者の一人である。文京区々会議員としての政治的手腕はもとより、全日本保護司のリーダーとしてもその英才は他の追随をゆるさぬところ。口八丁手八丁で、小柄に似合わず、反比例してスケールはすばらしく大きい人である。現在、全日仏の組織局長でもある。

×

×

×

×

特別寄付者

御芳名簿 一一 (順不同)

一、金貳万円也	西信寺	栗本俊道様
一、金貳万円也	長善寺	山本貫瑞様
一、金壹万五千円也	正受院	原口徳正様
一、金貳万円也	浄土寺	阿川貫達様
一、金參万円也	梅窓院	中島真孝様
一、金參万円也	高德寺	矢田俊雄様
一、金貳万四千円也	善光寺	小林観導様
一、金貳万円也	竜泉寺	伊東芳瑞様
一、金壹万五千円也	西光庵	北川教全様
一、金參万六千円也	西光寺	渡辺真海様
一、金五万円也	光専寺	服部并雅様
一、金壹万円也	慶元寺	山田元鏡様
一、金拾万円也	枯天寺	巖谷勝雄様
一、金貳万円也	心法寺	布村孝順様
一、金參万円也	大吉寺	成田有恒様

新規会員登録紹介(2)

神奈川

神奈川	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
-----	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

(以上二十八名寿福寺
伊藤芳隆様紹介)

「浄土」購読規定

一部 定価 金五十円

(送料 四円)

会費一力年

金六〇〇円

(送料不要)

浄土

四月号

昭和十年五月廿日
第三種郵便物認可

昭和三十四年三月廿五日 印刷

昭和三十四年四月一日 発行

定価 五十円

編集人 竹 中 信 常

発行人 佐 藤 密 雄

印刷人 神 谷 秀 雄

印刷所 神谷印刷株式会社

東京都品川区上大崎一ノ七八二

発行所 法然上人讃仰会

振替東京八二二八七番

宗派の枠をはづし、宗義の殻を除き

知解の障りを排け、素裸にした

法然像と親鸞像の前に立ち、

前者に選択を、後者に編依を見出す。

著者の胸底より湧き出でた快心の作！

東京外国語大学教授
東京大学・大正大学講師

増谷文雄 著

法然と親鸞

B6判 二四一頁
定価 二五〇円
〒 二四円

東京都千代田区大手町一の四大手町ビルNO五四一

在家仏教協会

振替・東京 一七七六五番

(目次)

法然と親鸞

ありしがままの姿を求めて、法然の人間の真相

法然の事業と本質 (その他)

法然の言葉

日本仏教の価値

法然の事業と親鸞の役割

法然の印象

法然のなみだ、法然のいかり、弥陀の正客、その他

東京高等保育学校長
駒沢大学文学部講師

内山憲尙著

B6判一六〇頁

予価 一八〇円

送料 三〇円

仏教保育二十章

―図解・仏教保育の理論と実際―

内山先生は東京高等保育学校、聖美幼稚園などの経営にあたり、多年、実際の仏教保育を通じて、指導理念をつかみ、それを実践されてきた方です。本書の執筆は、六・七年前より計画され、長い間資料をあつめ想を練つた上、このほど脱稿をみたものであり、幼稚園、保育所が数においては尤大なものになつたにもかかわらず、適切な保育指導書を欠いている今日、まことに時宜をえたものと思います。何卒、御一読をおねがい申し上げます。

(付録)

一、幼稚園関係法規

教育基本法、学校教育法抄、設置基準法

二、保育所関係法規

児童憲章、児童福祉法

東京都中央区京橋二の一(塩山ビル)

申込先

青山書院

振替東京九九三〇三番

お 焼 香

— お線香の上げ方 —

あわてゝ心がこもらなかつたり、丁寧すぎて他人の迷惑にならないよう、正しい仕方をおぼえて頂きましょう。お焼香をするのは香をたいて身をきよめ心を静めて仏さまにご供養する真心を表す為です。いろ／＼な場合がありますが、先づ遺族、導師のお坊さんに礼をしてしずかに香炉台の前に坐ります。仏さまに軽く一礼し、右手の親指、人差指、中指で香をつまみ、左手を軽くそえて頂く心持を表し、静かに香炉にくべます。回数是一回乃至三回です。すんだら数珠を両親指にかけ正しく合掌し丁寧に真心こめて礼拝します。終つたら静かに立つてご導師に一礼し、遺族に会釈して自席にもどります。



静かに頂いて

香 偈

お線香の上げ方も大体これにならうわけです。お線香の本数は、お焼香の回数と同じく「一心」「戒香と定香」「仏法僧の三宝供養」などを表す心持で一本乃至三本上げます。あまり沢山あげるの見苦しく粗相にもなりますから心をこめて上げて下さい。その時下端を少し折れば真直立つてまがりません。



お数珠を親指にかける

願 我 身 淨 如 香 炉
願 我 心 如 智 慧 火
念 々 焚 燒 戒 定 香
供 養 十 方 三 世 仏

心を静め身を清め
かおり妙なる
香をたき
いざみ仏に捧げなん